

# 東方合気神

憂鬱な者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

とある平穏な日。

道場に住む一人の少女が……

# 目次

【第一話】	幻想入り	1
【第二話】	瀬賀と門番	6
【第三話】	瀬賀とメイド長	13
【第四話】	不安	19
【第五話】	合気道	23
【第六話】	和合入門	30
【第七話】	タネ明かし①	35
【第八話】	タネ明かし②	43
【第九話】	集中心力	50
【第十話】	大きな小	55
【第十一話】	新生活	64
【第十二話】	少女の過去	69

【第十三話】	鬼と武道家	85
【第十四話】	氣の力	90
【第十五話】	氣と氣、無力の強さ	95
【第十六話】	氣の存在感	100
【第十七話】	鬼と武神	105
【第十八話】	無意識	113
【第十九話】	無私の境地	119
【第二十話】	帰宅	127
【第二十一話】	修行	134
【第二十二話】	四方投げ	140
【第二十三話】	中心力	145
【第二十四話】	基本	150

【第二十五話】	集中の力	154
【第二十六話】	呼吸力	158
【第二十七話】	魔法使いと武道	164
【第二十八話】	打撃	169
【第二十九話】	膝と突き	173
【第三十話】	達人の足	182
【第三十一話】	愛弟子	187
【第三十二話】	実戦合気道	192
【第三十三話】	志願者達	200
【第三十四話】	理想郷	206
【第三十五話】	形稽古①	210
【第三十六話】	形稽古②	215
【第三十七話】	形稽古③	220

【第三十八話】	座り技	226
【第三十九話】	膝行法	232
【第四十話】	打撃の基本技	237
【第四十一話】	武器への応用	242
【第四十二話】	武道の見方	247
【第四十三話】	成長	251
【第四十四話】	観光（前編）	257
【第四十五話】	観光（後編）	264
【第四十六話】	愛	269
【最終話】	合気道よ永遠に	273
【おまけ】	合気道とは	285

## 【第一話】 幻想入り

ポカポカと暖かく桜も咲き、小鳥がさえずる平穏な春の朝。

ある都会の隅にぽつんと建つ大きくとも小さくもない道場。

「和合気館（わごう あいきかん）」

そう看板に書かれた道場。

遠くからは通行人の足音や車が通る音、店の音楽などがざわざわと聞こえる。

だが、この道場の周辺は不思議と静かで、なにか落ち着く雰囲気を出している。

なにかこう、とても平和で落ち着くような、まるで極楽とも言えるようなとても心地の良いところだ。

そんな道場から聞こえるのは……

「せいっ!! いっ!!」 バタン!!

「はあ!! うっ!!」 ドンツ!!

「はっ!! おっ!!」 バアン!!

中からは男の叫びが聞こえ、その瞬間に驚いたような声を出し、叩きつけられたような音がする。

暫くして。

「「「「ありがとうございませした!!」「」」」」

大勢の男の叫びが外まで響き渡る。

そして大勢の大柄な男性達が道場から出てくる。

「ふう、最近の人は元気が良いね〜。」

道場の真ん中でお茶を啜り独り言を言う一人の少女。

一人ぼつんと座りお茶を啜る音は静まり返った道場にはよく響く。

彼女はこの道場の設立者であり師匠である。

「瀬賀 剛二三（せが つよふみ）」彼女の名前だ。

彼女は144cmという小さな体で17という若さである。

何故こんな少女がこの道場の師なのか？

理由はただ一つ。

強い。

とにかく強い。

彼女は僅か10歳にして柔道に入門し、初日で師範を秒殺するなどした腕前だ。

そんな彼女が最も得意とするものが「合気道」だ。

得意の合気道を人に教えるが為にこの道場を開いたのだ。

「静かだね。」

年寄り臭い喋り方。

彼女の口癖である。

オールバックを後ろでひとつに結んだ長い黒髪に袴姿。

一見、明らかに運動が得意そうな彼女だが口調は老婆を思わせるようなしんみりしたものである。

実は昔からこうだという。

現在家族はいなく学校にも通っていないらしい。

つまり彼女にとってはこの道場が家であり、仕事場なのだ。

日が暮れ始め、空が夕焼けの色に染まってきた時。

「それにしても最近、誰かに見られてる気がするね。」

お茶を飲み終えて一呼吸ついたところで独り言を言う。

「気のせいだといいけど。」

そういうと彼女は裏の台所に行き夕食の準備をする。

数時間後

夕食を終え、風呂も上がった彼女がまた独り言を。

「やはり見られている気がするね。は、は、やだね。」

そう言いながら寢室へと向かい、布団にこもる。

「おやすみなさい。」

そう彼女は言うとう目を閉じる。

翌日

目を覚ました彼女は妙な光景を目の当たりにした。

目の前には大きな木々が無数にあり、地面には草が生え茂り、布団は無くなっている。寝る前までいた筈の道場ではない。

とても大きな森であった。

「いや〜ね〜。朝食が食べられないじゃない。」

彼女は頬に片手を当て、おぼさんのような口振りで呑気なことを言う。

そして彼女はただひたすら真つ直ぐ歩いていった。

ただ真つ直ぐと、延々と続く森を進んで行くと明かりが見えた。

「あら、外かしら?」

そう言うとう彼女は駆け出した。

森を抜けたその先で目にしたのは真つ赤な館。



とても大きく、そして何よりもその赤さが目立つ大きな館。  
「紅魔館」である。

## 【第二話】瀬賀と門番

森を出て直ぐ目に入ったのは大きな館。

その真紅の館の名前は「紅魔館」

幻想郷で知らないものはないと言える程有名な建物だ。

「ほえ、こりやまた立派なものがあるねえ。」

紅魔館は元々かなりの大きさが、身体の小さい彼女にはより一層大きく見える。

「おや、彼処に見えるのは関係者の方かね？」

紅魔館の門の前に一人の少女を見つけると彼女はすぐさまそばに行く。

「ちよいと、そこの方。」

「お聞きしたいことがあるのですが宜しいですか？」

「……」

「こりや、熟睡してますな。」

駆けつけるも、その少女は寝ていたのだ。

それも立ったまま。

紅いロングヘアが美しいこの少女の名前は「紅 美鈴」

この紅魔館の門番である。

「困ったね。」

色々と聞きたいことがあるんですがね。」

彼女は少し難しい顔をして暫く考えた。

「中の方にお伺いしてみようかね。」

そう言うのと彼女は門に手をかけ開けようとしたが、その直後。

「待ちなさい。」

すぐ隣りから声が聞こえた。

「起こしてしまいましたかね？」

彼女は門番が気付いたと思つて渋々門番の方に顔を向ける。

が。

「ここを通す訳にはいきませんよ。ムニヤムニヤ」

「はっはっは、寝言ですかい。」

「可愛いもんだね。」

気付かれたと思つたら寝言であつた。

彼女は門から手を離し、ふう、と息を吐く。

「何も言わずに入るのは悪いし、やっぱりこの方に聞きましょう。」

そう言うと彼女は美鈴の身体を揺さぶる。

「もしもし、聞こえますか？」

起きてください。

「お聞きしたいことがあるのですよ。」  
すると。

「ん、ん〜？」

「ほっ、やっと起きてくれましたか。」

数分程続けてやっと目を覚ました。

「これで話せる。」と思った彼女だが違った。

「!?、な、何者だ!？」

「はい?。」

突然大声を出されて一瞬戸惑う彼女。

何とか説明しようとするが。

「落ち着いて下さい。」

「私はただ……」

「怪しいやつめ!!」

「さては浸入者だな!!」

話を聞いてくれなかった。

彼女は一旦距離を置いて再度説明しようとするも。

「落ち着いて下さいって。」

私はただお話を……」

「問答無用!!」

覚悟!!」

そう言うのと美鈴は彼女に向かって正拳突きを放つ。

彼女の顔面を捉えたと思つた瞬間。

美鈴の視界に映つたのは、一瞬にして天地がひっくり返つた風景だった。

「へ?」

間拔けな声をあげる彼女。

そのすぐそばには顔を覗かせる瀬賀の顔が。

彼女は投げられたのだ。

さっきの一瞬で美鈴は彼女に投げられたのだ。

(な、な、何が起きたの!?)

確かに私は彼女の顔を捉えた筈!!)

「あんだ、中々良い筋してるね。」

「おかげで投げやすかったですよ。」  
「混乱する美鈴に彼女はそう言った。」

「な、投げられた？ 私が？」

「ええ。」

「一体どうやって!？」

「まあ、顔を突いてきましたから。」

「ひよいつと、避けて貴女の身体を受け流しただけですよ。」

「??？」

彼女には全く理解出来なかった。

当然だ。

殴った筈なのに自分が投げ飛ばされるなど普通は信じられない。

だが投げられたというのは事実。

彼女はそれは認めたが、原理がわからないのだ。

「も、もう一度殴っていいですか？」

彼女は確かめる為にもう一度同じことをするつもりだ。

「ええ、構いませんよ。」

何時でもどうぞ。」

彼女は余裕たっぷりて手を背後で組んですらいる。

美鈴は少しイラツとして違うことを考えた。

(殴るふりをして、蹴りを入れてみよう。)

そう思い彼女は行動に出る。

正拳突きを寸止めで戻し、すかさず上段蹴りを繰り出したのだ。

「これはいける!!」

そう思った彼女だったが結果は驚きだった。

足首を触られた様な感触がしたと思つた瞬間。

また天地がひっくり返つたのだ。

今度はひっくり返されたのだ。

「え?..え?」

さつきよりも困惑する美鈴。

そこに瀬賀が一言。

「見え見えですよ。」

そう言とうと彼女は美鈴に手を差し出す。

「大丈夫ですか?」

「え?あ、はい。」

手を取り合い起き上がる美鈴。

「とりあえず、お話したいことがあるので宜しいでしょうか？」

「あ、はい。」

とりあえず中にどうぞ。」

そう言われると彼女は微笑み、お辞儀をして門を通り、紅魔館に入る

彼女のそばを一緒に歩く美鈴は彼女を見つめながら考え事をしていた。

(この人は一体……)



## 【第三話】 瀬賀とメイド長

門を過ぎたその先には大きな扉が。

「うくん、間近で見るとこれまた立派だね。」

「はあ、そうですね。」

「ええ、大層立派な御主人が住んでいらつしやるのでしようね。」

「ええ、まあ、立派……ですね。」

少し言葉に詰まった。

大きな玄関の扉を開いて入る。

そして目に映つたのは隅々まで真っ赤な内装。

「へえ、中まで真っ赤ですか。」

「はい、紅魔館と呼ぶぐらいですから。」

「こまかん？」

「はい、この館の名前です。」

「へえ。」

開いた口がふさがらない程関心しているようだ。

そんな彼女の前に一人の少女が。

「あら、お客様で？」

柱の影から突然出て来たこの少女。

彼女の名前は「十六夜 咲夜」

この紅魔館のメイド長だ。

「おや、初めまして。」

瀬賀 剛二三と申します。」

特に驚く事も無く、挨拶をする。

「如何のようなご用件で？」

「この人は私達に聞きたいことがあるみたいですよ。」

「はい、立ち話もあれなので入らせていただいたわけです。」

「そう、でも聞きたいことがあるわ。」

「はい、何でしょう？」

「貴女は何者なのか聞かせていただきましょう。」

「武道家です。」

「え？」

即答した。

二人共あまりにもあつさり答えられたので驚く。

「も、もう一度言ってもらえるかしら？」

「武道家ですよ。」

「またも即答した。」

彼女は「何か変なことを言ったかな？」というような少し困惑した顔で言うため、尚更返答に困る。

「そう、武道家ね。」

「武道家が何の用でしょうか？」

「ここが何処なのか聞きたいのですが。」

「ここは紅魔館よ。」

「知ってます。」

「え？そ、そう…。」

トントン拍子のように流れるように答えられて少し困惑する咲夜。

「この建物が何なのかは先程この方から聞きました。」

私がお聞きしたいのはこの地域が何処なのか？です。」

「そう言われて少し反応する咲夜。」

「貴女、もしかして外来人かしら？」

「？」

「貴女、出身地は？」

「東京都です。」

「知らないところね。」

「その服装も見たことが無いわ。」

「??？」

彼女に説明をする。

.....

「ふむ、つまり私がいた場所とこの場所は世界自体が違うというわけですか。」

「ええ、そうなるわね。」

「私は帰れるのでしょうか？」

「それはわからないわ。」

「それは困りました。」

私は道場の師匠ですから弟子の方達が心配です。」

「お気持ちはわかるけど如何しようも無いわね。」

少し落ち込む瀬賀。

「グルルルルル。」

何かの音がした。

「あははは、すみません。まだ何も食べてないので。」

彼女の空腹の音だった。

少し恥ずかしげに頭を掻く。

「そういえば貴女、靴が無いじゃない。」

「あ、本当ですね。気づきませんでした。」

二人がふと気がつく。

「あゝ、寝て起きたら此処にいましたから靴が無いんですよ。」

「平気なんですか？森には小石や枝が落ちていて危ないと思いますが。」

美鈴が心配そうに聞く。

「いえ、全然平気ですよ。」

「え？」

「そのうちわかりますよ。」

それより、何か食べ物が欲しいのですが。」

駄目ですかね？」

駄目元で聞いてみる。

「それはお嬢様に聞いてみないとわかりませんね。」

「お嬢様ですか？」

「ええ、この紅魔館の御主人です。」

私についてきてください。」

そう言われ紅魔館を案内される。

## 【第四話】不安

咲夜に案内されたのは一つの部屋。

瀬賀「ここは？」

咲夜「お嬢様のお部屋です。」

そう言い、扉をノックする。

「コンコン。」

咲夜「失礼します、お嬢様。」

瀬賀達もお辞儀をし、入る。

そこにいたのは小さな少女。

レミリア「あら、咲夜。一体何の用？」

彼女は「レミリア・スカーレット」

この紅魔館の当主だ。

咲夜「この方についてお話があつて来ました。」

レミリア「誰？」

瀬賀「瀬賀 剛二三と申します。」

レミリア「ふくん。で、何の用？」

彼女達はさつきまでのことを説明する

レミリア「なるほどね〜。」

瀬賀「やはり無理ですかね？」

レミリア「別に構わないわよ？迷惑さえかけなければ。」

瀬賀「本当ですか!?!いや〜、ありがとうございます。」

レミリア「でも条件があるわ。」

瀬賀「はい、何でしょう？」

レミリア「その『武道』とかいうのを観せてほしいわ。」

瀬賀「はあ、わかりました。ですが、お相手はどちらに？」

レミリア「咲夜、頼んだわ。」

咲夜「わかりました、お嬢様。」

美鈴「咲夜さんがやるんですか!?!」

レミリア「そうよ、何か問題でも？」

美鈴「え、いや…。大丈夫だと思います…。」

美鈴は不安を感じていた。

あの経験が原因だ。



まだ、あの現象のことを考えていたのだ。

レミリア「貴女もいいわね？」

瀬賀「はい、構いませんよ。」

レミリア「そう。それじゃあホールに集まってちょうだい。全員集めてね。」

咲夜「かしこまりました。」

そう言うとき咲夜は館中の人を集めに行った。

瀬賀達はホールへと向かう。

ホールに向かいながら瀬賀はレミリアに聞いた。

瀬賀「私が「勝ったら」ここに泊まることを許すと約束してくれますか？」

レミリア「いきなり何よ。さっき言ったじゃない。」

瀬賀「いえ、貴女は「ただの人間ごときが咲夜に勝てるわけないから適当に許可して

おこう。」

約束するとは言っていないから万が一咲夜が負けた時にはとぼけよう。」などとお考えかと思ひましてね。」

レミリア「!？」

瀬賀「まあ、貴女のような方がその様な事を考えているとは思えません。」

横目でレミリアを見る。

その目からは何か「見透かしている」ような気がする。

レミリア「え、ええ。私がそんなことするわけないじゃない。」

冷汗が流れた。

レミリア「変な疑いを持つなんて失礼ね。」

瀬賀「それで約束の方は？」

瀬賀が立ち止まる。

レミリア「……。わかったわ。約束するわ。」

そう言われると瀬賀はにっこりと微笑む。

瀬賀「そうですか。ありがとうございます。」

とても優しい笑顔だが、今のレミリアにとってはむしろ「恐ろしく」感じた。そうこうしてる間にホールの扉に着いた。

## 【第五話】合気道

扉を開けた先には大勢の人が。

紅魔館内のメイド達だ。

入場すると拍手の嵐が瀬賀達を包み込む。

「パチ。パチ。パチ。パチ。パチ。パチ。パチ。」

レミリアはホールの端にある大きな椅子に腰掛け。

瀬賀はホールの真ん中に立つ。

そこには咲夜もいた。

完全に「見世物」のような状況だ。

「貴女も無謀ね。引き受けたということは私に勝てる自信があるみたいね。」

「はははっ、そんなことないですよ。」

手をパタパタと「そんなこと無い」という風に振る。

「そろそろいいかしら？」

レミリアが2人に聞く。

「はっ」

「それではどうぞお手柔らかに。」

2人共返事をし、瀬賀は咲夜に笑顔でお辞儀をする。

「ふん。」

しかし彼女は嘲笑ったように鼻で笑う。

「それでは両者、位置へ。」

1人の妖精メイドが2人に言う。

2人は指定の位置に着き、周りはいしんと静まり返る。

緊張が走る。

「始め!!」

開始の合図と同時に動いたのは咲夜だ。

彼女はナイフを取り出した。

「武器の使用を禁止するなんて一言も言っていないからね!!」

レミリアがそう叫ぶ。

彼女は始めから瀬賀をここに泊める気は無かったのだ。

「悪く思わないでください、ね!!」

そう言うのと彼女はナイフを投げる。

彼女のナイフ投げの腕前は相当なものだ。

そのスピードはプロ野球選手のピッチング並みだ。  
だが。

「ほれ。」

そこには誰もが目を疑う光景があつた。

「え？な、嘘?！」

なんと瀬賀はナイフの「刃」を人差し指と親指の二本でナイフを「摘んで」止めたのだ。

会場が騒めく。

当然だ、ナイフを挟んで止めるならまだしも、彼女は刃を指で挟んでるのだ。

彼女のナイフは両刃であり、普通だったら指が切れる。

だが彼女の指には傷一つ無い。

驚きが隠せない咲夜に彼女は言う。

「確かに貴女の腕は大したものです。

ですが、動きが見え見えですよ。」

そう言い、彼女にウイंकをする。

「つつ!!ならこれは如何かしら?！」

彼女は懐から一枚のカードを取り出し、宣言する。

幻世『ザ・ワールド』

すると瀬賀の周囲に無数のナイフが現れる。

そう、彼女は「時を止められる」のだ。

無数のナイフが彼女に向かって飛んで行く。

「勝った。」

レミリアがそう呟く。

が、彼女。

いや、会場全員が奇妙なものを目にする。

なんと、無数のナイフは空を切り、ナイフを投げた本人である咲夜が宙を舞っていた

のである。

宙を舞う咲夜の側にはさつきまでナイフの先にいた瀬賀が。

「バァン!!」

咲夜は勢いよく床に落ちる。

いや、正確には「投げられた」のである。

会場の人々は騒めくどころか全員開いた口が塞がらない状態だった。

そんな静まり返った会場に声が響き渡る。

「いほ〜ん。」

瀬賀が人差し指を立て、高々と腕を上げて言う。

投げられた咲夜は大の字になって完全に伸びている。

瀬賀はくるりとレミリアの方へ向き、こう言う。

「勝ちましたよ?」

啞然としている。

当然だ、あんなに余裕たつぷりになれる程信頼していた者が開始たった「30秒足らず」で倒されたのだ。

レミリアは激情して叫ぶ。

「あ、貴女何やったのよ!?能力があるのを隠しておくなんてこのインチキ!!卑怯者!!」

それはこっちの台詞だ。

開始してから武器の使用を許可するなどと言う奴がよく言えたものだ。

罵倒されるも彼女は微笑みながらこう答える。

「合気道ですよ?」

しんと静まり返る。

しかしレミリアは彼女の前に叫びながらズカズカと近づく。

「はあ!?何が合気道よ!!意味わからない言い訳するんじゃないわよ!!」

彼女のすぐ目の前に立ち、彼女にパンチを繰り出した。

しかし。

「ほいっと。」

「べたん!!」

パンチは避けられ、彼女の伸ばした腕に手を当てると、彼女は床に倒れこんだ。

「え?」

何が起きたかわからず困惑する。

しかし、大声で罵倒しながらパンチを出したのにその場にぺたんと這いつくばってる彼女の姿は非常に滑稽に見えたらしく。

ところどころから「くすくす」と笑い声がある。

それに釣られたのか会場の観客全員がもう大に吹き出す。

大勢の笑い声に包まれ、真っ赤に赤面するレミリア。

「うううう……。ここのバカア!!」

彼女は半分べそをかきながらホールを飛び出す。

そんな彼女を見送るように手を振りながら瀬賀がこう言う。

「約束守ってくださいよ。」

笑い声から拍手に変わる。

中からは「凄い凄い」「不思議〜。」などと感想も聞こえる。



観客達がドツと彼女に握手などを求めにやってくる。

「私、貴女のファンになりました!!」

「握手してください!!」

「一体、如何やったんですか!？」

次々と彼女に質問などを求める者が出てくる。

彼女はちゃんと握手をしてあげながらも答える。

「大したことじゃないですよ。」

などと答えつつ握手をする大勢に囲まれた彼女を美鈴が見つめ、呟く。

「凄い……。」

## 【第六話】和合入門

対決が終わり、昼になった。

瀬賀は紅魔館の庭を散歩していた。

美鈴と一緒に。

「ふん、ふん♪」

「……。」

幻想郷も丁度春で、とても気持ちのいい天気だ。

彼女はご機嫌で鼻歌まで歌う。

そんな彼女を見つめる美鈴。

そして彼女は突然背後から瀬賀に殴りかかったのだ。

「せいっ!!」

「ほいっ。」

ドタン!!

彼女の拳はあっさりと避けられ、腕を捕られ、軽々と投げられる。

「くっ……。」

悔しさで言葉を失う。

そして彼女は突然瀬賀の前に土下座をし、叫ぶ。

「私を弟子にしてください!!」

突然の弟子入りに少し驚く瀬賀。

「いきなりどうしたのですか?」

「貴女の素晴らしい武術を学びたいのです!!お願いします!!」

「……。」

彼女は美鈴に背を向け、呟く。

「貴女は何故闘うのですか?」

「え?」

彼女に質問される。

「それは……。」

少し間を置き、答える。

「仲間を守る為です。」

「では貴女は平和とは何かわかりますか?」

「争いの無い世界のことです。」

「ええ、確かに間違っはいません。ですが……。」

彼女の方に振り向き、こう言う。

「貴女は敵を傷付けて平和が生まれると思えますか？」

「そ、それは……。悪はあつてはいけないので多少の怪我は……。」

すると彼女は溜息を吐き、こう言う。

「それは駄目です。それでは貴女は憎まれ、敵は再び悪事を働くでしょう。」

「え？ではどうすればいいのですか？」

彼女はにっこりと微笑み彼女の肩に手を置き、答える。

「それは、敵とお友達になればいいのです。」

「そ、そんなこと出来ません!!敵の仲間になるなんて!!」

「そうじゃありません。自分を殺しにかかってくる敵に「憎しみ」を生ませないようにするのです。」

「そ、そんなことどうやって……。」

「貴女は既に経験している筈ですよ？」

「え？」

彼女は困惑する。

そんな様子の彼女に瀬賀はこう答える。

「貴女が私に投げられた時、痛かったですか？」

「え?…そ、そういうえば全然痛くなかったです。」

「貴女はその時、私のことをどう思いましたか？」

恨もうと思いましたか?」

「そ、そんなことありません!!」

その答えに彼女は微笑む。

「そう、相手を傷つけずに相手を感服させる。それが武術において「敵と友達になる」と」なのです。

傷付け、痛めつけて負かすなど、それは「和」から外れています。

相手を傷つけずに相手を負かす。そうすることで相手は憎もうとは思わなくなるのです。」

そう言われ彼女はハッと気付く。

「力で相手を迎撃するではありません。

相手の「心」を受け入れ、それを受け流すのです。

そうすれば相手に「悪い心」を生まさず、相手の憎しみを「解消」出来るのです。」

「瀬賀さん…。」

「痛いというのは「心」に邪念が入るから感じるのです。

邪念を捨て、優しい心を攻撃に使うことで「傷付かない攻撃」になるのです。」

「つ、つまり、合気道というのは「誰も身体に、心に傷が付かない武術」ということですか?」

「正解!!」

すると彼女は美鈴の頭を撫でて褒める。

「合気道は「和合」の為の武道。

相手を叩きのめす為のものでは無いのです。」

「瀬賀さん…。いえ、先生と呼ばせてください!!」

「合気道を学びたいですか?」

「はい!!」

「誰も傷付けたくないですか?」

「はい!!」

すると彼女は笑顔で美鈴に手を差し伸べる。

「弟子入りを許可します。」

「———っ!!ありがとうございます!!」

彼女は瀬賀の手を両手でギュツと握り、涙を流す。

紅 美鈴、合気道入門である。

## 【第七話】タネ明かし①

遂に弟子入り出来た美鈴。

そんな彼女達のところに1人の少女が。

「ここにいたのね貴女達。」

「あ、咲夜さん。」

「なに泣いてるのよ。」

「あ、すみません。さつき凄く嬉しいことがあつて。」

服の袖で涙を拭く。

「で、何か用ですか？」

「貴女達にお使いに行つてほしいのよ。」

話に割り込む瀬賀。

「お使いつて、此処にお店があるのですか？」

「ええ、あつちに真つ直ぐ行けば『人里』があるのよ。」

「ほお、私も行つてみたいですわね。」

彼女はまた幻想郷のことを知らないため、好奇心が擦られる。

「一緒に行きましょう先生!!」

「先生?」

咲夜が反応する。

「はい、ついさつき弟子になったんです!!」

「そう、弟子ね。」

瀬賀を見下ろす。

しかし瀬賀は笑顔で返す。

「怒ってますか?」

「いいえ、勝負で負けたんだもの。恨みなんて無いわ。」

「それはよかったです。」

「ぐうぐう……。」

彼女の腹が鳴る。

「あはは、そういうえげめまだ何も食べてませんでした。」

「もう昼過ぎましたよ先生、早く行きましょう。」

「そうですね、では行きましょう。」

彼女らを見送る咲夜。

「はあ……。一体何だったのかしら、あの時……。」



## 道中にて

「先生、聞きたいことがあるのですが良いですか？」

「はい、何ですか？」

「咲夜さんとの鬪いの時、先生はどうやってナイフを止めたり、瞬間移動をしたりしたのですか？」

「うーん、知りたいですか？」

「凄く知りたいです。」

「では教えましょう。」

そう言うと彼女は美鈴の前を「後ろ向き」で歩きながら話し始める。

「まず、ナイフを止めたことですが、別にあれは何も不思議なことではないのですよ？」

「え？」

「刃物つて、どうやって物を切つてると思えます？」

「え？えーつと…。」

「正解は『摩擦』です!!」

「摩擦ですか？」

「はい、鋸はどうやって物を切ってるかわかりますか？」

「え？それはくあれですよ。小さい刃が少しずつ削ってるんですよ？」

「はい、その通りです。では、ナイフはどうでしょう？」

「あ!!もしかして、目に見えない程細かい凹凸で削ってるんですか？」

「ピンポン。正解。」

手で丸を作り、褒める。

「刃物というのは細かい凹凸で物体を構成する分子を『払って』切断するのです。

つまり、刃物という物は『滑らせなければ』切れないのです。」

「た、確かにそうですが、一体どうやって?」

「ふむ、実際に体感した方が早いでしょう。」

そう言うと彼女は走り出す。

「あ、先生!!どうしたんですか!？」

追いかける美鈴。

「はい!!ストーツプ!!」

急に止まる瀬賀。

「うわわわあー!!」

ザザザーっと滑る美鈴。

「き、急に止まらないでくださいよ!!」

「はい、問題です!!」

「へ?」

「貴女は今どうなりましたか?」

「え、え〜つと、滑りました。」

「はい、では滑ってどうなりましたか?」

「止まりました。」

「何故でしょう?」

「え、そ、それは〜あれですよ。ブレーキがかかるからですよ。」

「そうです。徐々に速度が落ち、止まりましたよね?」

「はい。」

「では、私がナイフを止められたのは?」

「ブレーキがかかったからですよね?」

そこで彼女はハッと気づく。

「も、もしかして先生。指でブレーキをかけて止めたんですか?」

「はい。」

「で、でもそれじゃあ指が切れてしまいますよ!!」

「美鈴さん、手を出して下さい。」

「え？あ、はい。」

手を出すと彼女は手を掴み、彼女の指を掴み、グリグリと動かす。

「美鈴さん。今貴女の手はどうなっていますか？」

「え？動いています。」

「皮膚はどうなっていますか？」

「動いています。」

「では頬を出して下さい。」

「え？こ、こうですか？」

腰を曲げて顔を向ける。

すると彼女は美鈴の頬に手を当て、動かす。

プニプニと気持ち良い感触だ。

「今、貴女の頬はどうなっていますか？」

「う、動いています。あ!!」

何かに気付く。

「ナイフを掴むと、少しだけ皮膚もつられて動きますよね!？」

「はい、それで？」

「皮膚が動けば、ナイフと『擦れ』ないので、切れませんよね!」  
「正解!!」

そう、ナイフを摘んだ時、皮膚には切れるまで『余裕』があるのです。その余裕にナイフが持つ運動エネルギーが流れ、速度が減少します。

そして、最終的に止まるわけです。」

「なるほど。」

「スプーンで生卵を割らずにキャッチしたりするのも同じ理屈です。」

そう、急ブレーキと同じである。

短い距離で一気に速度を落とそうとすると、その距離にエネルギーが集中力する。

すると慣性の法則により発生するエネルギーは途絶えても、車が持っている運動エネルギーにより車は進み続けようとする。

すると、タイヤは止まっているので地面と強い摩擦が生まれる。

その摩擦がナイフで言う「切る」為のエネルギーなのだ。

消しゴムは摩擦で削れる。

皮膚も摩擦で削れる。

ではどうすれば良いかと言うと、長い距離をかけてブレーキをかければ良いのだ。

するとタイヤの回転速度は徐々に遅くなり、それにつられて車が持つ運動エネルギー

も減ってゆくのだ。

すると最終的に「タイヤの弾性」によって止まるのだ。

このタイヤの弾性というのがさっきの「皮膚」なのだ。

運動エネルギーが「摩擦力」を越えることで「擦れる」という減少が起きるのだ。

つまり、摩擦力を上回らない量まで運動エネルギーを落とせば「擦れる」こと無く止まるのだ。

つまり、タイヤは削れずにすむ。

つまりナイフ止めも、皮膚と刃が「擦れない」用にナイフの速度を徐々に落とせば指は切れずに済むのだ。

彼女は腕を目一杯伸ばし、速度が落ちるまで「回り続けていた」のだ。

「というわけで、以上、ナイフ止めのトリックでした。」

「やっぱり先生は凄いですね。」

## 【第八話】タネ明かし②

ナイフ止めの秘密がわかって御満悦の美鈴。

そこで彼女はもう一つ聞いた。

「では、あの瞬間移動はどうやったのですか？」

「あれも大したことでは無いですよ？」

「はあ。」

「ここに石ころがあります。」

「これを投げるとどんな軌道を描くでしょう？」

「放物線を描きますよね？」

「これをウンと速く投げるとどうなるでしょう？」

「遠くに飛びますよね？」

「速く投げるたびにどうなります？」

「直線に近くなりますよね？」

「はい、ナイフも同じですよね？」

「はい。」

「つまりどうなります?」

「え、え〜つと、狙った所に真つ直ぐ飛びますよね?」

「正解。」

では、もし『軌道が見えたら』避けられますか?」

「え?それはそうですよ。」

その軌道の線に当たらなければいいのですから。

も、もしかして。

見えるんですか?」

そう言われ彼女はニヤリと笑う。

「ええ、見えますよ。」

「う、嘘ですよね?」

「嘘じゃありません。」

物が飛んでくるときに『光の玉』が飛んでくるんですよ。」

「光の玉?」

「ええ、それが何かはわかりませんが、その光の玉が描いた軌道を通って物が飛んでくるのです。」

ですから、その軌道避ければナイフは当たりません。」



「で、でも、ナイフは何十本とありましたよ?」

「そう言われ彼女は手を出す。」

「ナイフは両刃でした。」

「この手の縁を刃だと思ってください。」

「え? は、はい。」

「では私の手をナイフだと思って摘んでみてください。」

「こ、こうですか?」

「今、何処に触れてます?」

「手の甲と手の平です。」

「これをあのナイフに例えると?」

「あ!! ただの刀身ですよね!!」

「正解!!」

刃物は刃の方から見ると鋭利な物体ですが、横から見ると『ただの板』です。

ただの板を触っても切れませんよね?」

「え、つまり、先生はナイフの側面を触っていたのですか?」

「はい、あのナイフの群れの中を『掻き分ける』ように進んでました。」

「な、なるほど。」

確かにナイフの向きは全部揃ってましたから、両手を揃えて蛇のように進めば簡単に進めますよね。」

そう、おまけに彼女は小柄なので尚更簡単である。

「で、でもあの瞬間移動はどうやったんですか？」

「瞬間移動？」

私はいくらなんでも瞬間移動なんて出来ませんよ。」

「え？」

「ボールを蹴るとどうなります？」

「飛んでいきます。」

「ボールは遠くに飛ぶ度に速度はどうなります？」

「落ちていきますよね？」

「では、ボールを蹴った瞬間は？」

「凄く速いですよね？」

「では走る時は如何でしょう？」

「えーっと、結構速いですよね？」

「では、その『瞬間』をずっと続けたらどうなりますか？」

「すごく…速いです…。」

「はい、物体が動く際に『初速』というものがあります。

この初速というのは物体を飛ばす際に『一番速い』瞬間です。

徐々に加速するものは除きますけどね。

人間が走り出す瞬間の速度もかなり速いものなんです。」

※あのウ○イン・ボルトのトップスピードは42〜48 km/hと言われています  
(これはイエネコの走る速度に匹敵します)

因みに平均速度は37〜8 km/hです。

「私と彼女の距離は5mほどでした。

仮に私が時速40 kmで動いたとしたらどれくらい時間がかかると思います?」

「え、え〜つと。」

「0.55秒かかります。

瞬きにかかる時間は0.1〜0.2秒です。

間をとって0.15としましょう。

ものを見てから反応するまでの総度は平均で0.2秒程です。

つまり、0.55+0.35=0.2秒です。

人間の反応速度は今言った通り、0.2秒程です。

私はもつと速く動けますからこの結果より速いでしょうね。」

「え、え〜っと。」

それってどれくらい凄いですか？」

「食べ物を食べようとした時に溢して、それを地面に落ちる前にキャッチするくらいです。」

「何それ凄いです。」

「まあ、簡単に言えば、『人間の反応速度に入る前に相手に到達した』ってことです。」

つまり、視認出来ないわけですから『瞬間移動』したように見えるかもしれませんね。」

「ち、ちよつと待つてください!!」

あの、人間の反応速度に入らない速度で動くって、先生も人間じゃないですか!!」

「ふふふ、言うと思いましたよ。」

美鈴さん、『条件反射』って知ってますか？」

「え? なんですかそれ?」

「ものを見ただけで『勝手に反応する』反射神経の一種です。」

例えば、梅干を見ると唾液が出ますよね?

あれも条件反射です。

つまり『無意識』に反応するものなんです。

動く際に、視認及び反応↓脳↓思考↓決定↓脊髄↓筋肉と信号が送られますが。

反射神経などは、視認及び反応↓脳↓脊髄↓筋肉と2つの工程がカットされるので  
す。

そのため、反射神経は反応速度がとても速いのです。

私は反射的に動きました。

つまり反射神経で動いたわけです。

それに加え、私は特別なことをしてさらに速く動いています。

ですから私は常人ではありえない速さで行動出来るわけです。」

「な、なるほど、つまり先生は『反射神経と特別な動き方で相手に反応される前に倒した』  
ということですね?」

「正解!!」

謎は解けましたか?」

「はい!!ありがとうございます!!」

## 【第九話】集中心

「さて、ここまで来たなら『集中心』のことも教えましょうかね。」

「集中心ですか？」

「はい。」

「集中心って、戦う時は誰でも集中していると思いませんか？」

「ふふふん♪その『集中心』ではありません。」

合気道での『集中心』です。」

少し自慢気に言う。

「何が違うんですか？」

「まず、合気道で大切な『部位』は何処だと思いますか？」

「え？え〜つと、腕ですか？」

「残念!!ハズレです。」

「では何処ですか先生？」

「膝と足の親指です。」

「え？」

意外な答えに驚く。

「合気道では『膝と足の親指』がとても大切なのです。」

「何故ですか？」

「合気道には『如何に重心を動かすか』が大切なのです。

膝が無ければ動けませんからね。」

「では指は何なのですか？」

「軸です。」

「軸？」

「大抵の方は『踵』を軸に方向転換しますが。」

合気道では『足の親指』を軸に動くのです。」

「ほお、何故親指でないと駄目なのですか？」

「上体に『繋がってる』からです。」

「え？」

「美鈴さん、私の足跡を見てください。」

「足跡ですか？ 一体何故…?!？」

見るとその足跡は『親指』だけ深く凹んでいたのだ。

「え、こゝ、これは一体？」

「何故私は地面に親指を食い込ませているかわかります?」

「全くわかりません。」

「これは『引き金』みたいなものです。」

「引き金?」

「はい、スタートする為の『ゴム』と言ってもいいでしょう。」

「は、はあ。」

しかし、何故ゴムになるのですか?」

「筋肉の『張力』です。」

「え?」

まあ、確かに筋肉のバネで素早く動くのはわかりますが、親指の力だけでは、さほど変わらないと思うのですが。」

「はっはっは。『親指』だけの力ではないですよ。」

『指先から腰まで全部』です!!」

「え? 親指と腰の筋肉は繋がってない筈ですが…。」

「ええ、繋がってませんよ。」

「はい?」

「だから繋がらせるのです。」



「???」

「親指に『集中』して食い込ませると、『腰の中で「ビーン」とゴムが伸びる』ような感覚がするのです。」

そうすると『下半身全部』の力が親指に『集中』するのです。」

「わ、わけがわかりません。」

「それはそうでしょう。『科学で解明出来ない力』なんですから。」

「え、ええ…。」

「この『集中力』によって筋力などが『格段に』上がるのです。」

でもこれは超能力ではありません。

『誰でも出来る』ものなんです。」

「え?。」

「『氣』を一点に集中させて生まれる力。」

それを『集中力』と呼びます。」

「『氣』ですか?」

「いいえ、『氣』です。」

「はい?。」

「『氣』とは、人などの精神に係るものに付くものです。」

そして『氣』とは、『誰もが持つ自然のエネルギー』のことです。」

「え〜つと、何を言ってるかわかりません。」

「ふふふつ、合気道の一番不思議なところはそこなんですよ?」

「え?」

「合気道には科学で解明出来ない力を使うことがあるのです。」

普通の方には理解出来ないでしょう。」

「ええ〜…。」

「それよりも、人里に着いたみたいですよ。」

## 【第十話】 大きな小

2人が長々と話しているといつの間にか人里に着いていた。

「へえ、中々賑やかで良いところですね。」

「そうですね？」

「はい、賑やかなのは良いことです。」

にっこりと彼女に微笑む

「さて、買い物でしたね。早く行きましょう。」

「あ、はい!!」

.....

小一時間程人里を回り買い物を済ませる。

「えーっと、これとこれ、あとこれを買えば終わりですね。

これください。」

「あーよ。」

中々の量で彼女は両手がいっぱいだ。

「大丈夫ですか？ 私も手伝いますよ？」

「いえいえ、先生に持たせるなんてとんでもないですよ。」

「そうですか。」

(ぐうぐう。)

彼女の腹がまた鳴る。

「あははは、すみませんね。」

「大丈夫ですか？ 帰りに何か食べて帰りましょう。」

「忝い。」

そう言い2人とも団子を買ひ、食べながら帰る。

「そういえば先生はお幾つですか？」

「17ですよ。」

「17!？」

「(こんなに小さな子があんなに強いなんて…)」

「歳なんてどうでもいいじゃないですか。」

「そ、そうですか…。」

団子を食べ終わり、ふと見渡すと、何やら人だかりが目に入る。

「おや、何かあったのでしよう?」

「みたいですね、少し見てみますか?」

「ええ。」

そう言い、見てみると。

「てめえがボケボケしてんのが悪いんだろうが!!」

「なんだと!? てめえの方こそ避けなかったのが悪いだろうが!!」

何やら男が掴み合って揉めていた。

「一体、何事ですか?」

野次の1人に聞く。

「ああ、どうも歩いていたらぶつかって、それで揉めてるらしい。」

「ああ、よくありますね。」

私がいる都会でもよく見かけましたよ。」

「ああ!!先生、殴り合いになりましたよ!!」

「ふうん、どれ、私が一肌脱ぎますか。」

そう言い、殴り合う2人に仲裁に入る。

「あー、あー、2人共喧嘩は良くないですよ？」

「何だてめえ!!人の話に割り込んでくんないよ!!」

「そうだ、引っ込んでろ!!」

仲裁に入るも怒鳴られ相手にされない。

「あんな子供が大人の喧嘩に入ってどうするんだよ。」

「怪我してもしたらねえぞ。」

「ていうか、何処の子供だ？」

野次馬達がヒソヒソと彼女の話をし始める。

「せ、先生……」

少し心配そうに美鈴が彼女を見守る。

「うーん、あまり使いたく無いのですが、仕方ありませんね。」

そう言い彼女は少し彼らから距離を置くと。

「ほっ!!」

取っ組み合う彼らの1人の脇腹に『突き』が入る。

「うおえ!!」

すると彼はなんと2m程も吹っ飛び、野次馬達の中に突っ込む。

「喧嘩は良く無いですよ。」

「!!!」

吹っ飛んだ彼は翻筋斗打って、痛さのあまり声も出ない。

「な、なんだてめえ!!」

もう1人が彼女に向かって叫ぶ。

「まあまあ落ち着いて。」

そう言うも彼は彼女に掴みかかる。

「てめえ!!」

どうやら混乱しているようだ。

しかし彼は彼女を掴むほんの寸前で止まる。

「うっ……!!」

彼は何やら苦しそうに顔色を変えている。

「如何したんだ?」

「何が起きたんだ?」

ざわざわと野次馬達が騒ぐ。

「あ!!あれを見て!!」

美鈴が彼の足元を指差し、野次馬達に教える。

「つつ!!いででで!!」

彼は足を押さえて悶える。

なんと、彼の親指が彼女の親指で抑えられているのだ。

そして急に彼女が野次馬達に説明し出す。

「これは簡単そうに見えますけどね。」

実はこれ『集中力』なんですよ。」

彼は彼女の脚をペチペチと叩くが彼女は微動だにせず説明を続ける。

「これは親指の腱を抑えていましたね。」

そう簡単に立ち上がれなくなるんですよ。

今、こうやって皆さんに話してますがさつきも言った通り『集中力』ですから。

皆さんに説明するために愛嬌振りまいてますがね。

『集中力』が切れると途端に効かなくなりますからね。」

とうとう彼は半ベソかきながら彼女に謝る。

「も、もうしませんから離してください!!」

そう言われ彼女は足を退かす。

すると彼は脱兎の如く去って行く。

「ふく、これで一件落着ですかね。」

しかし、気が緩んだ彼女の背後から男が飛びかかってくる。



さっきのもう一人の男だ。

「てめえ!!」

「ふっ!!」

(ドンッ!!)

しかし彼女はサツと後ろに下がり、背中が彼の胸を叩き。

彼は後ろにすっ 飛ぶ。

「おえええええ!!」

反射的に彼は衝撃で吐き気を催す。

「惜しかったですね、どれ、もう一度チャンスを与えますよ。」

彼女はニヤニヤしながらうずくまる彼を見下ろす。

「て、てめええええ!!」

「またも彼は彼女に飛びかかる。

しかし。

「よっ!!」

彼女の人差し指が彼の喉元に突き刺さる。

「っえっ!!」

(ドタン)

彼は後ろに180。程回転し、地面に倒れる。

「これはですね、この人差し指。

指が『集中力』で即、剣になるのですよ。」

「またも彼女は野次馬達に説明をする。

「てっめ!!ぎげん!!」

腰に手を当てて仁王立ちになつて彼女の手首を掴む。

しかし。

「これ、ちと痛いんですがね。こうやると。」

「いででで!!痛い!!痛い!!」

掴みかかった彼の手首が捻られている。

彼は地面に這いつくばり、身動きが取れない。

「これ、離せばいいんですけどね。

中々離してくれませんね。」

「そう、彼女は『掴んでいない』のだ。

彼が『掴んでいる』のだ。

そして彼はとうとう痛さに耐えかねて泣き出す。

「——っ!!ごめんなさい!!ごめんなさい!!もうしませんから!!勘弁してください!!」

そう言われ彼女は技を解く。

彼もサーっと直ぐ逃げた。

そんな彼を見送りながら彼女が一言。

「もう喧嘩はするんじやありませんよ!!」

そう言い、彼女は野次馬達の前に「どうだ!!」と言わんばかりに胸を張る。

(パチパチパチパチパチパチパチパチ)

拍手が送られる。

「さて、問題も解決しましたし、帰りましょう。」

「あ、は、はい!!」

美鈴にそう言い、帰る。

「(やっぱり凄いな、この人。)」

## 【第十一話】新生活

「大分日も落ち始めてきましたね。」

「そこまでじゃないですよ。まだ3時ぐらいですよ?」

「いえいえ、私程に観察力があると結構違うものですよ?」

喋りながら帰る2人。

そこに1人の少女が。

「あのー、少しいいでしょうか?」

「おや、誰ですか?」

やってきたのはカメラを持った1人の少女。

彼女は「射命丸 文」

幻想郷の新聞記者だ。

「先程、人里で『男2人を小さな少女があつさり倒した』などという話を小耳に挟んだので。」

もしかして貴女がその少女なのでは?と思ひまして。」

「あらら、結構有名になつてゐるみたいですね。」

「やはり貴女がそうでしたか。」

幾つか聞きたいことがあるのですが良いですか？」

「うーん、如何しますか？」

「帰るのにまだ時間はありますから多少は良いと思いますよ？」

「そうですか。」

ではお答えします。」

「ありがとうございます。」

ではまずお名前を。」

「瀬賀 剛二三です。」

「ふむふむ。」

では、貴女は武道なるものが出来るみたいですが何という武道ですか？」

「合気道です。」

「なるほど。」

では貴女は何者ですか？」

「私は此処で言う『外来人』です。」

向こうでは合気道の道場『和合合気館』という私が設立した道場の師をやっています。」

「へえ。」

では合気道とはどのようなものですか？」

「世界から争いを無くす為の、人の心を傷付けない武道です。」

「ほお。」

ふむふむ。」

「これくらいで良いですか？」

「では、写真を一枚良いですか？」

「はい、構いませんよ。」

「それでは、はい、笑ってくださいーい。」

カシヤ

「ご協力ありがとうございます。」

それではまたいつか。」

そう言うのと彼女は猛スピードで飛んでいった。

「新聞記者さんですか。」

此処でも私は有名人になってしまうのですかね？」

「先生はあつちでも有名人だったんですか？」

「ええ、まあ。」

それより、早く帰りましょう。」  
「そうですね。」

そして帰宅する。

「ただいま帰りました。」

「あら、随分遅かったじゃない。」

「ええ、いろいろありまして。」

帰ると咲夜が出迎えてくれた。

「……。」

「何ですか？」

「貴女、一体あの時如何やって私を倒したの？」

「やはり気にしていましたか。」

「ええ。」

「簡単に言えば。」

「貴女の知覚速度に追いつかずに接近したっただけです。」

「そう…。どうりで気付けないわけだわ。」

「まだ聞きたいことはありますか？」

「いいえ。」

でも、いつかまた勝負したいわ。」

「そうですか。何時でも待つてますよ。」

そう彼女に微笑む。

「本当、不思議ね。貴女は。」

「よく言われます。」

「それより咲夜さん。」

先生まだほとんど何も食べてないですから夕食を作つてあげてください。」

「ええ、わかつてるわ。」

それじゃあ、改めまして。

紅魔館へようこそ。瀬賀 剛二三様。」



## 【第十二話】少女の過去

帰宅し、一息つく。

美鈴は門番の仕事をやりに行くが瀬賀も一緒にやると言い、一緒に門に立つ。

「先生、聞きたいことがあるんですけど。」

「はい、何ですか？」

「先生って合気道の開祖ではないですよね？」

「ええ、そりゃあそうですよ。もっともっと昔に出来たものですから。」

「じゃあ、先生は何で合気道を始めたんですか？」

「…。」

少し彼女は間を置き、語り始める。

「私が合気道を始めた理由は……」

—— 7年前 ——

とある柔道場で。

「じゃますんぜく。」

扉を蹴り破り、現れたのは当時10才の瀬賀。

「何だ君は!!」

「わしは瀬賀つちゆうもんじゃ!!ちよいと相手を探してるんじや!!」

「君、此処が何処かわかつてるのかね?」

「ああ、わかつてんぞ。馬鹿の溜まり場だろ?ぺっ!!」

「なっ!!」

彼女は畳に唾を吐き、踏ん反り返る。

「こ、このガキ!!」

そんなに相手が欲しけりや相手をしてやる!!」

そう言い、青帯の男が彼女の前に出る。

「けっ、青帯かよ。」

師範呼んでこい!!師範を!!雑魚に用はねえ!!」

「こ、こいつ!!てめえええええ!!」

男が彼女に掴みかかりに飛びかかる。

「つせいやあ!!」

しかし男は彼女に襟を掴まれ外まで投げ飛ばされる。

「ぐわああああ!!」

男は外のアスファルトの地面を滑走する。

道着を着ていた為擦過傷は免れたとはいえ、かなりの衝撃が彼を襲う。

「なんて荒い背負い投げだ!!」

他の門下生達がざわつく。

「はっ、だから師範を呼んでこいって言ってんだよバカ。」

「そんなに私とやりたいのかお嬢ちゃん。」

前に出たのは2mはある黒帯の男。

彼が師範のようだ。

「ほおう、お前が師範か。」

「やっ」と骨がありそうな奴に会えたぜ。」

両者共相対する。

彼女は120cmしかない為、その体格差は絶望的とも言える程だった。

「あくあ、病院送りになってもしらねえぞ俺ら。」

門下生の1人が眩く。

「へっ、デカいだけじゃわしには勝てねえぞ。」

彼女は師範の男に中指を立てる。

「ふっ、後悔するなよ!!」

そう言い彼は猛スピードで彼女に飛びかかる。

「ふんっ!!」

彼女は掴みかかりに来たかれの股下で足をドンツと踏み鳴らす。

「うっ!?!」

彼は一瞬跳び上がる。

「うおおおおりやああああああ!!」

跳び上がった彼を彼女が掴み、精一杯の力で背負い投げを繰り出す。

「うぼああああ!!」

彼は勢いよく床に叩きつけられ、衝撃のあまり一瞬跳ねた。

叩きつけられた彼は白目を向き、痙攣している。

「ふう、流石に重えな。」

「師範!!」

門下生達が失神した師範の男達に駆けつける。

「マジかよ、師範が一瞬で…。」

「このガキなんなんだよ!?!」

門下生達が彼女を見て騒つく。

「誰がガキだつて?!」

彼らに一步踏み出し、足を踏み鳴らす。

「ヒイツ!!すみません!!」

彼らは彼女を怯えて逃げ出した。

当然である、自分達より遥かに強い人間が一瞬で倒されたのだ。

怯えて当然である。

「また、君は道場破りをしたのかね?!」

「してねえよ、ちよいと手合わせしに行っただけじゃ。」

小学校の生徒指導室で彼女は生徒指導の教師に怒られていた。

彼女は机の上に脚を乗せて彼を見上げている。

「わしは暇なんじゃ、人様の趣味に指図していいんか?先生はよく?」

「くっ!!くっ、こいつ!!」

彼女にはこの頃から家族はいなかった。

その為、保護者がどうこうとは出来なかったのだ。

そう、彼女は当時、とてつもない問題児だったのだ。

せの性格は現在とは真逆と言ってもいいほどだった。

当時彼女は、柔道三段、空手五段、剣道四段もの実力を持っていた。

それほどに彼女は強かった為、学校では何人もの生徒や教師を病院送りにしたり、道場を見つけては格闘家を叩きのめしていた。

そしてある日彼女は。

「さて、今度はここじゃ。」

彼女はなんと『警察署』の前にいた。

彼女は警察署の警察と勝負をするつもりらしい。

「うゝつす、やってるかゝい?」

扉を蹴破り、そこにいたのは。

「何だ君は!」

「通りすがりの女の子でゝつす。」

「何でこんな子供が? 他の連中は何をしているんだ!」

扉の先にいたのは武術の稽古をしている警察達だった。

「他の連中? ああ、道中会った奴らはみんなお昼寝してるぜ?」

「なに!」

彼女は警察署の警察の4割を倒して来たらしい。

「まあ、そんな事は如何でもいいんじゃない。

お前さんらと勝負がしてえんじゃない。」

「…。わかった。

だが負けた暁には如何なるかわかってるね？」

「あゝ、はいはい、わかっていますわかつてます。

じゃ、全員まとめてかかつてきな。」

「なに!？」

彼女は7人の警察をまとめて相手をするつもりだ。

つまり七人組手だ。

「どうした?ビビってるのか?公務員さんよく?」

「つく!!後悔するなよ!!」

「ふっ。」

彼女は飛びかかるって来た1人の股下で足を踏み鳴らす。

すると彼は一瞬跳び上がった。

「おらあ!!」

彼女は跳び上がった彼を掴み、背負い投げを極める。

「ぐわあああ!!」

すかさず彼女は他の警察に同じように股下で足を踏み鳴らし、跳び上がったところに背負い投げを極める。

（ふははは!!極まる極まる!!）

どいつもこいつも股下で足を踏み鳴らせばビビって跳び上がりやがる!!

ここに背負い投げを極めればどんどんぶつ倒せる!!

まったく、面白いぐらい引っかかりやがるぜ!!）

彼女は次々と警察達を同じように投げて行く。

しかし。

「はあああああ!!」

最後の一人が彼女にタツクルをしたのだ。

「うぐっ!!」

彼女は腕と頭を押さえつけられ身動きが出来ない状態になる。

「く、くそっ!!離せ!!離せえ!!」

「このガキ!!意外と力がありやがる!!」

そして翌日生徒指導室にて。

「ふん、自業自得だ。」



「むっ。」

彼女は包帯や湿布、絆創膏だらけで教師に怒られていた。どうやら捕まった時に暴れ合って怪我をしたらしい。何とか彼女は抜け出せはしたらしい。

「わしは負けてはいねえからな!!調子に乗んなよハゲ!!」

「なっ!?!ハゲだと!?!」

「ああ、ハゲだ!!ハゲハゲハゲ!!バーコード!!」

「くっ!!」

実に子供らしい暴言だ。

その姿は少し可愛気があつた。

「どうするんですか校長!!」

彼奴、まだ道場破りとかやるかもしれないよ!?!」

「うゝむ。」

放課後、生徒指導の教師と校長が彼女について話し合っているらしい。

「昨日は警察署で暴れたらしいですよ!?!このままじゃ更に酷いことに…!!」

「まあ、落ち着きたまえ。」

「私に良い考えがある。」

「良い考え？」

翌日彼女は校長室に呼び出された。

「何だよ校長。」

「君は大層強い、君はおそらく自分は誰にも負けないと思っ  
ているだろう。」

「あたりめえーだ!! そんな当然のことを言いにはわざわざ呼び出したのか? ああ?」

彼の机を蹴飛ばし、机の上に飛び乗り彼を見下す。

「確かに君は強い。」

だが、そんな傲慢でいられるのも今日までだ。」

「なに? どういう意味だ?」

「君に見せたいものがある。」

そう言い、放課後に2人はあるところに行く。

『養神館』そう書かれた看板が掲げられている道場に彼女は連れてこられた。

「なんじゃこりゃ?」

「君は『合気道』を知ってるかね? 素晴らしい武術だから一度見てみるといい。」

「ふーん、まあ、どうせくだらねえものだろうけどな。」

2人は中に入り、稽古を見学する。

そこでは小さな老人が次々と苦もなく大柄な男達を何度も何度も連続で投げていた。そこで彼女は。

「何だこれ？ インチキじゃねえーか。」

そう言い、呆れた態度をとる。

そこで彼女にその老人が。

「一緒にやりせんか？」

彼女を誘ったのだ。

「いいぜ、やってやるよ。」

そして彼女はニヤリと笑い、誘いを受けた。

(化けの皮剥がして恥かかせてやるよ爺が。)

そして2人は向き合う。

(相手はわしが柔道をやってるのを知ってるだろう。)

なら、掴みに行くふりをして股間を蹴り上げてやるよ!!)

彼女はじわじわと距離を詰める。

「……。」

しかし彼は微動だにせず棒立ちのままだった。

(もらった!!)

彼女は掴みかかるふりをして思い切り前蹴りを放った。  
しかし次の瞬間。

彼女はいつの間にか彼から5 m程離れたところにいた。

「へ?」

彼女は門下生の人達に抱えられていた。

小柄な為凄く軽い。

彼女は何が起きたかわからず暫く間拔けな顔になっていた。

暫くして彼女はハッと気付き、彼に飛びかかる。

しかし、結果は同じだった。

彼女はまたもいつの間にか彼から離れており、門下生の人達に抱えられていた。

どうやら彼女は『投げられていた』らしい。

そして投げられた彼女は門下生の人達の所まで飛ばされ、キャッチされていたよう  
だ。

「え?ええ?」

全く状況が理解出来ず混乱する。

そして彼女は一呼吸起き、彼と向かい合う。

(な、何が起きてるかわからねえーが、このままじゃわしのプライドが!!)

暫く睨み合い、掴みかかりに『行き始めた』瞬間。

パシツと脚を蹴られたのだ。

そして彼女は。パタツとあつさり転んでしまう。

「ええ？ええええええ!?」

気合いを入れていたのにあつさり転ばされてしまい、赤面する。

「ぷっ…!!」

門下生達がクスクスと笑い出す。

気合いたつぷりだったのに小さな老人にあつさり転ばされて赤面している小さな少

女。

その光景は実に可愛らしく可笑しかった。

「み、見るなあ!!くそお!!」

慌てて距離を置くも、気が動転しており、足が纏れて尻餅をついてしまう。

それが更に彼らのツボにはまった。

「わははははは!!」

門下生達が大爆笑する。

「う、うう…。」

真つ赤に赤面する彼女の元に相手の老人が。

「どうですか？これが合気道です。」

につこりと微笑みながら彼女に手を差し伸べる。

彼はこの道場の師範だったのだ。

「え？ああ、その…。」

赤面しながらもじもじとしてしまいなから言葉に詰まる。

そんな彼女の元に。

「大丈夫かいお嬢さん？」

「元気出しなよ。」

「誰も馬鹿にしないから元気出しな？」

門下生達が彼女を心配して来てくれたのだ。

「え？ええつと、その…あの…。」

初めてこんなに優しくされた為、少し戸惑う。

「あの、じ、じゃあ、その、弟子にしてください…。」

恥ずかしげに上目遣いで師範を見上げ、弟子入りを懇願する。

すると彼は。

「いいですよ、一緒に頑張りましょう。」

笑顔で応え、彼女の手を握り立ち上がらせる。

「おめでとう。」

門下生達が拍手を送り、彼女を歓迎する。

「は、ははは……。」

照れくさそうに頭を搔く。

……………

「そんなこんなで、私は合気道を学ぶようになったわけです。」

「へえ、先生にそんな過去が。」

「因みに私の名前、瀬賀 剛二三は昔は剛二三ではなかったんですよ。」

「え？改名したってことですか？」

「はい、昔は瀬賀 剛二（せが ごうじ）って名前だったんです。」

「それはまた、随分と勇ましい名前でしたね……。」

「はい、だから一新して剛二三という人間として新しく歩んだんです。」

「へえ。」

「あの先生は私の恩師ですよ。うんうん。」

「でも、投げられて赤面しちゃうなんて、あの時のお嬢様みたいですね。」

「うぐっ!!そ、その話は忘れてください!!」

「あはは。先生可愛い。」

痛いところを突かれ赤面し、取り乱す。

そんな彼女を見て和む彼女であった。



## 【第十三話】 鬼と武道家

昔話をし、特に変わった出来事も無く一日を終えた。

(この生活に慣れるまで結構かかりそうですね。)

そう思い、彼女は眠りにつく。

翌日

「おはようございます。」

「あら、結構早いよね。」

「ええ、何時も稽古をやりますからね。」

これくらい早く起きないと準備とかに時間がかかりますから。」

彼女は朝5時前に起きた。

何時も稽古をやっていた為、その慣れなのだろう。

「貴女も早いですね。」

「ええ、メイドなもの。」

いろいろ忙しいのよ。」

そんなことを話しているところに新聞が飛んできた。

咲夜が窓を開けたおかげで窓を突き破られずに済んだ。

そして見事にキャッチした彼女が新聞を開く。

「あら、貴女じゃないこれ。」

「あ、本当ですね。」

昨日、取材されましたからね。」

新聞の見出しに大きく彼女の姿が写っていた。

「ふくん『武道家の外来人を発見!!彼女が扱う合気道とは!?!』ね。」

「これはまた私を取材しに来ますかね?」

「はい、おはようございまーす!!」

「もう、来ましたか。」

新聞を読んでいる彼女らの前に突然現れたのは新聞記者の射命丸 文。

「どうやらまた取材に来たらしい。」

「今度は何を知りたいんですか?」

「貴女の強さを知りたいんです!!」

「強さですか?」

「はい、合気道について非常に興味深いものでして。

その合気道というものは一体どれほど強いのか調べたいのです。」

「調べると言いましても相手がいらないではないですか？」

「いい人がいますよ。」

「いい人ですか？」

「はい、ついてきてください。」

「あ、ちよつと待つてください。」

美鈴さんに伝えておかないといけませんから。」

「はあ。」

「美鈴さん、私ちよつと出かけてきますね。」

「え？ 何処に行くんですか？」

「あの記者さんが合わせたい人がいると言うので、その人のところに行くんです。」

「そうですか…。」

まあ、私は門番ですからここを離れるわけにはいきませんから。

それでは先生、行ってらっしゃい。」

「はい。」

「用事は済みましたから行きましようか。」

「はい。それじゃあ私に掴まっててください。」

「え？」

そう言うのと彼女は猛スピードで飛んだ。

「貴女が飛ぶのはこの前見ましたからいいですが。」

結構な速さですね!!」

「まあ、幻想郷最速ですから私。」

突風に晒されながら必死に彼女にしがみつく。

「そろそろ着きますよ。」

そう言うのと彼女らは地面の大きな『穴』に入った。

「何処ですか(´▽`)?」

『地霊殿』です。」

そしてその穴の底に到着する。

「うくん、いますかね〜?」

「誰がですか?」

「貴女に合わせたい人です。」

あ、いました!!」

その人物を見つけ、2人共駆け寄る。

「ちよつといいですか?」

「お、新聞記者の天狗じゃないかい。」

私に何か用かい?」

2人が会ったのは額に大きな角が1本生えた女性。

彼女は「星熊 勇儀」

ここ地霊殿の住『人』、というより『鬼』だ。

「あ、ちよつと頼みごとがあるんです。」

「頼みごと?」

「この人と闘ってほしいんです。」

## 【第十四話】氣の力

この人と闘ってください。

彼女は瀬賀に指を指してそう言う。

「こんな小さな子とやり合えって言うのかい？」

「はい、見かけによらず凄い人だと噂なので。」

「へー、あんた名前は？」

「瀬賀 剛二三です。武道家をやっています。」

「ほお、武道家かい。」

それは楽しめそうだね。」

「どうぞお手柔らかに。」

そう言い彼女は腕を出す。

「ん？腕相撲でもやるのかい？」

「私の腕を曲げられたら貴女の勝ちでいいですよ。」

「は？」

彼女の発言に一瞬間抜けな顔になる。

「ち、ちよつと瀬賀さん!!」

この人は鬼なんですよ!!?それも幻想郷一の怪力と言われるほどの!!」

「へえ、そうなんですか?」

でも構いませんよ『絶対に曲げられない』ですから。」

「へえ、絶対だね?」

やつてやろうじゃないか。」

「はい、貴女に『氣』というものを見せてあげたいですから。」

「氣?よくわからないがいくよ!!」

「ではまず『普通に踏ん張った状態』をやりましょう。」

私は腕に力を入れて曲げられてたまるか!!という風に踏ん張ります。」

「よし、そら!!」

カクッ

彼女の腕はあっさり曲がった。

「簡単に曲がつてしまいますよね?」

ではもう一度やってみてください。」

「踏ん張っていてあの程度だろう?」

いくらやつても同じに決まってるだろう?」

しかし。

「ん？ぐつ…!!」

彼女の腕はビクともしない。

しかも彼女は夕涼みでもしてるかのように涼しい顔をしている。

対して彼女は顔を真っ赤にして彼女の細い腕に『全力』を出している。

「んぐぐぐぐつ!!ふんぬうううう!!」

幾ら力を入れても彼女の腕はピクリともしない。

そしてとうとう彼女はギブアップする。

「はあ…はあ…、ど、どうなってるんだ？」

「まだまだありますよ？」

そう言い彼女は目の前に真っ直ぐ立つ。

「私を持ち上げてみてください。」

「も、持ち上げる？」

「はい。」

「ははは、幾ら何でも持ち上がらないわけないよな？」

「ふふふつ。」

そして彼女は瀬賀の脇の下を掴み、踏ん張る。



ふわっ

彼女は簡単に持ち上がった。

「それではもう一度やってみてください。」

「まさか重さは変わらないよな？」

そう言い彼女はもう一度持ち上げる。

が。

「んん!？」

彼女の身体はまるで地面に接着されているかのように動かない。

「ふんぬぬぬぬ!!」

幾ら踏ん張っても持ち上がる気配すらない。

当然彼女は何かに掴まってなどいない。

彼女は鼻歌でも歌いそうなほどのんびりした顔をしている。

対して彼女は血管が浮き出そうな程力んでいる。

「ま、まいった!!降参だ!!」

彼女は遂に疲れて完全に降参する。

「一体どうなってるんだ!?!何か能力でも持っているのかい!?!」

「ははは、能力なんか持ってないですよ。」

これが『氣』の力なんです。」

## 【第十五話】 氣と氣、無力の強さ

140ちよつとの少女に完敗した彼女。

彼女は瀬賀に質問する。

「氣つて一体なんなんだ？」

そう言いと彼女は。

「ちつちつち。

『氣』ではなくて『氣』ですよ。」

彼女は手のひらを指でなぞつて教える。

すると彼女は。

「『氣』つて、それつて古い方だろう？」

なんでわざわざ古い方を使うんだい？」

「それは文字の意味と『氣』にあります。」

「え？」

「『氣』という文字の『气』は天地を意味しています。

つまり地球の、自然の『氣』です。」

その中の『メ』は人が発する『氣』を意味します。

何故『米』から『メ』になったかという点、昔に中国が『氣は使いすぎると無くなってしまう。だから使いすぎないように「メ」ておこう。』という理由で『メ』を意味する『メ』になったのです。

『米』はその逆。

本来は『氣は無くならない』ものなのです。

むしろ『氣』は常に発し続けた方が良いのです。

だから私は『氣』と表すんです。」

「なるほど、それより『氣』とは一体なんなんだ？

超能力者とかがよく使うらしいが？」

「『氣』は超能力ではないですよ。」

『氣』は『誰もが生まれつき持っている』ものです。

超能力のように見えるのは『氣が閉じこもっている状態が日常的になっている』からですよ。

本来は『常に氣は出ているもの』なんです。」

「じゃあどうやって『氣』を出すんだ？」

「簡単ですよ。」

『心』が大切なんです。」

「心？」

「はい。」

現代の人は皆、心に大きなストレスを抱えています。

そのストレスが心に鍵をかけ『氣の流れを止めてしまっている』のです。

ストレスだけではありません。

『氣』の流れは『力を込める』ことでも止まってしまっているのです。」

「それはじゃあ、つまり『力を入れるな』ってことか？」

「はい。」

「そんな馬鹿な。」

「既に貴女は自分の身体で経験したでしょう？」

「うっ…。」

「人は『天地の氣が流れる管』なんです。」

しかし今では蛇口となっています。

人々が『氣』を流せなくなってしまうからです。

何故『氣』が流れないのかわかりますか？」

「それはさっき言った力みじゃないのか？」

「それはそうですが結果的に言う、『心身統一が出来ていない』からなんです。」

「心身統一って僧侶でもなければ出来ないだろう。」

「いいえ、簡単に出来ますよ?」

「え?」

「心身統一、つまり『心の流れと力の流れを一緒にする』こと。」

大雑把に言う『動きに心を集中させる』んです。

例えば、歩く時は歩くことに集中、握る時は握ることに集中するなど。

『他のことを考えなければいい』んです。」

「うーん、難しくてよくわからないな。」

結局どういう条件が揃えば『氣』が出せるようになるんだ?」

「条件は4つです。」

一つ、臍下丹田に心をしずめ

二つ、心身統一する

三つ、氣が出ていると思ひ込み

四つ、氣を出す

これだけです。

この中の一つでも出来れば『他も自然に出来る』ようになります。」

「ちよつと待つてくれ。」

「思い込むつてどういふことだい？」

「簡単に言えば『自己暗示』みたいなものです。」

『氣が出ている』と思ひ込めば『氣』は出るんです。」

しかし、誰もが同じ量の『氣』が出るわけではありません。」

出せる『氣』に限りはありませんが、多く出せるようになるには修行が必要です。」

「うーん、本当に『氣』なんて出るのかい？」

「仕方ありませんね。」

「もっと『氣』を見てもらいましょう。」

## 【第十六話】氣の存在感

「貴女は『氣』といつても物理法則とかを利用したトリックなどと思つてはいませんか？」

「そ、それは…。」

「思つてますね？」

「少しだけな…。」

「そう言われ彼女はニコツと笑う。

「じゃあ『氣』の存在感を目視出来るようにしましょう。」

「え？」

「ちよつとした厚紙とか無いですかね？あと、割り箸など。」

「厚紙と割り箸？」

「紙は本の栞位のも良いですよ。」

「わかった、取り敢えず探しに行くか。」

「そして数十分後

「これでいいかい？」



「うんうん、いいですよ。」

「一体これで何を？」

「まあ、見ていけばわかりますよ。」

それではその割り箸を両手で持つてください。」

「え？こゝ、こゝか？」

「はい、では行きますよ。」

「え？」

ヒュッ

ピシッ

「あ、あれ？」

「どうですか？『切れた』でしょう？」

「う、うっそ〜。」

彼女はなんと『割り箸を槩で切った』のだ。

「今のは『氣』を使って切りました。」

では次は『氣』を使わずにやってみましょう。」

ヒュッ

くしゅっ

栞は割り箸に当たって潰れてしまった。

「『氣』の有無がしつかりわかったでしょう？」

「あ、ああ。」

「『氣』の力は無限大です。」

彼女はニコツと笑い、そう言う。

「文さんも撮りたいものは撮れました？」

「は、はい。」

さつきまで空気だったが、彼女はちゃんと仕事をしていた。

「ところで文さん。」

「この方に随分と弱気じゃないですか？」

「そ、それはその……。」

彼女は鬼と他の妖怪達との関係を話した。

「なるほど、貴女はこの方達の力の前にひれ伏していたのですね。」

「は、はい。」

「それは妙な話ですね。」

人間の私その鬼さんに簡単に勝ってしまったのに、天狗さんの貴女が負けるなんて。」

「うなっ!？」

彼女達は深く傷付いた。

「くっ…、し、しかしあんたは『技をかけられる状況』のみでしか私に勝ってないじゃないかな  
いか。」

「じゃあやります?」

「え?」

「だからちゃんと戦闘をやりましょう。」

「こ、後悔するなよ!？」

「はい、そんなの当たり前じゃないですか。」

「こ、こいつ…!!」

そして彼女達は広場に出た。

「鬼の力を舐めてもらっては困るからねえ。」

「全力で行かせてもらおうよ!!」

「はい、その方が私も勝ちやすいですし。」

「え?」

「ん?」

「合気道は相手の力を利用した武術ですよ。」

相手の力が強ければ強い程相手を倒しやすくなるんですよ？」

「ほ、ほおう、鬼の力を侮るなよ嬢ちゃん!!」

「はい、早く始めましょう。」

「こ、このお…!!」

「完全にあの人のペースに乗せられてしまってますね勇儀さん…。」

## 【第十七話】 鬼と武神

「さあ、始めようか。」

そう言い彼女は身構え、彼女にジリジリと近付く。

対して彼女は両手をだらんとしており、完全な脱力状態だ。

(ノーガード戦法か？ 私相手に対したものだな。)

そして彼女が間合いに入り込んだ瞬間。

「もらったあ!! その首を飛ばさせてもらおうぞ!!」

そう言い彼女は思い切り彼女の首をめがけて手刀を打ち込んだ。

筈だった。

気がついたら彼女は逆さまにひっくり返っていた。

「え？ あれ？」

頸を下に、まるで後転を途中でやめた様に間拔けな体勢だった。

そんな彼女を瀬賀がニコニコしながら見下ろしている。

「っ!!」

そして彼女は慌てて体勢を立て直す。

右手がズキズキと痛い。

一体なにが起こったか右手を見てみると。

「っな!?!」

右手首が真っ赤に腫れ上がっていた。

彼女は鬼であり、パワーだけではなく身体も相当頑丈だ。

身体の小さい上、人間である彼女が鬼である彼女にこれほどのダメージを与えるのは不可能な筈だ。

「いい、一体何をした!?!」

「貴女が私にプレゼントしようとした力をお返しただけですよ。」

クスツと笑い彼女に答えた。

（何を言っているんだ? 力を返すなんてどうやって…。）

「ちっ、だがまだ使える部位はある!!」

そう言い彼女は再び彼女に突撃する。

「これならどうだあ!?!?!!」

そして彼女は助走をつけたまま、思い切り左手でストレートを放った。

が。

「よいっと。」

彼女の拳が伸びきった瞬間。

彼女は彼女の腕を手でポンつと押したのだ。  
するとどうだろう。

ドンツ!!

「おっ!?!」

彼女の身体が後ろに向かって吹っ飛んだのだ。

そしてそのまま観戦していた文にまで突っ込んで行く。

「むぎゆう!!」

「ぐはっ!!」

「ほほ、中々の馬力ですね。」

感心した顔で吹っ飛んでいった彼女を見る。

(な、何が起きた!?!確かに殴った筈だ!!なのに何故!?)

起き上がり彼女を唾然とした顔で見る。

「くっ!!よくわからないが負けてたまるかあ!!」

またも彼女は彼女に突撃し。

今度は彼女を掴みにいった。

「おっと。」

彼女はひよいと後ろに下がるが彼女に手の指を掴まれた。

「はははっ!! 捕まえたぞ!! 指一本もらわせてうぞ!!」

しかし彼女はニヤリと笑う。

「ゆゝびきりげゝんまゝん嘘吐いたゝら針千本のゝます。」

「!？」

突撃彼女が歌い出し驚くのもつかの間。

「指きった!!」

「うっ!!」

歌い終わると彼女はグルンと後ろに回転してひっくり返っていた。

ドシイイン!!

派手に地面に叩きつけられる。

(なんだなんなんだ!?! 私が掴んだのは人差し指一本!! それに私は力で負けたのか!?)

いや、私は力が入らなかつた!! 入れられなかつた!!

私は指一本に投げられたのか!?)

ひっくり返ったまま、彼女は目を白黒させる。



「どうしました？降参しますか？」

そんな彼女を彼女は見下ろしてそう言う。

「くっ!!このっ!!」

彼女は急にガバツと起き上がり、彼女を掴みにかかる。  
しかし。

「ほっ。」

バァン!!

彼女はあっさりと彼女に地面に叩きつけられた。

「こ、このっ!!」

またも起き上がるが。

「ほれ。」

ドシイイイン!!

「くっそお!!」

「ほい。」

バァン!!

起き上がる。

叩きつけられる。

起き上がる。

叩きつけられる。

起き上がる。

叩きつけられる。

何度も何度も彼女は起き上がる度にあっさり地面に叩きつけられる。

「こ、こ、このっ…。わ、わた、私は負け、ま、負けるわけには…。」

ふらふらと遂に『立たせてもらえた』

もう、目の焦点が合っていない。

呂律もまともに回らない。

「もう、意識はドロドロでしょう。」

彼女は何十回と地面に叩きつけられたのだ。

「貴女は身体は丈夫ですが、何度も連続で地面に叩きつけられれば脳が耐えられないでしょう。」

そう。

身体は鍛えればいくらでも頑丈になる。

しかし脳は鍛えられない。

ある程度の衝撃なら大した問題は無いが、連続で衝撃を受ければ脳は『カップの中のプリンを振る』ように脳は『共振』のように次第に大きく揺れる。頭をぶつけるのと、大きく何度も頭を振るのとの違いと同じだ。

「私は……」

「負けるのか？」

「ふらふらになりながら彼女に近付く。」

「うっ…!!」

「そして彼女は急に吐き気を催した。」

「そりゃあ軽い脳震盪状態ですもの。」

「吐き気もしますよ。」

「そう言い、彼女は近付いてきた彼女の額をポンつと押す。」

「バタン」

「彼女は簡単に倒れてしまった。」

「ほら、もう踏ん張ることも出来てませんよ。」

「わ、私はまだ…!!」

「仕方ありませんね…。」

そう言うのと起き上がってきた彼女の首を両手で叩いた。

ヒュッ

パチッ

すると彼女はパタッとその場に倒れた。

半分白目になって倒れている。

「ちよ、ちよつと!!何したんですか!?!」

「ちよいと神経を刺激して失神させただけですよ。」

そう言いながら彼女は失神した彼女をズルズルと引きずりながらどこかに行く。

「ああ、待っててください!!」

彼女も追いかけて行く。

## 【第十八話】 無意識

「ちよちよ、何処に行くんですか!？」

「この方を看病出来る所ですよ。」

文が彼女に聞くとそう答えた。

「いや、それにしても大したものですよ。」

入り身突きをあれだけくらくらつても倒れなかつたんですから。」

「え? そんなに強いんですかあれ?」

「ええ、そりやあとでも。」

「でも貴女は全然疲れてないじゃないですか?」

「合気道はそういうものですよ。」

「は、はあ…。」

「あ、あそこに泊めてもらいましょう。」

「え!? ちよ、ちよつと瀬賀さん!!」

彼女は早速その大きな『館』に入る。

「ごめんくださうい。誰かいますか?」

「待つてくださいますよ瀬賀さん!! 此処はあの…」

「あら、誰かしら?」

「ギクツ!!」

瀬賀に話しかけたところ、急に誰かが割り込んできた。

「あ、この方を看病してあげたいんですよ。」

「泊めてもらってもいいですかね?」

「ふうん。構わないわ。」

「ありがとうございます。」

「ああ、瀬賀さん!!」

「貴女は?」

「ギクツ!!」

「い、いやあ私はその、あの人の取材をしているんですけど…。」

「そう。何をそんなに緊張しているの?」

「え、あ、その…。(あの鬼を赤子扱いで倒したあの人にビビってるなんて言えない…。)」

「へえ、さっきの人があの星熊勇儀を倒したと?」

「ギクツ!!」

「面白そうね。貴女もどうぞあがって。」

「は、はい…。」

彼女は『古明地 さとり』

この館の主人である。

「さてと、これでしばらくすれば目をさますでしょう。」

案内された寝室で勇儀を寝かせた。

「ところで貴女は？」

「私は古明地 さとり、此処の当主よ。」

貴女は？」

「私は瀬賀 剛二三です。」

此処でいう外来人というものです。」

「そう。」

ところで貴女、彼女を倒したみたいね？」

「ええ、軽く。」

「軽く？」

「ええ、軽く。」

「…。嘘じゃないみたいね。」

「はい?」

「いや、なんでもないわ。」

「ふうん。」

ところでお隣の子はどちら様で?

「え?」

側にいた文も反応する。

「隣って、誰もいないわよ?」

「え? いやいや、いるじゃないですか。」

「もしかして…。」

「?」

「貴女、『こいし』が見えてるの?」

「誰ですかそれ?」

「私の妹よ。」

「へえ、その子がですか。」

「お姉さんすごい。」

「うわっ!!」



「やっぱりいたのね…。」

突如少女が現れ、文が驚く。

「お姉さんどうして私がいるのわかったの〜?」

「え?目の前にいるんですから誰でもわかるでしょう?」

「え?」

さとりが反応する。

「貴女、こいしは『無意識を操れる』のよ。」

貴女の意識を操って認知出来ない筈だけど…。」

「え?でも普通に見えましたよ?」

「…。貴女、ちよつと私と勝負してみない?」

「勝負ですか?」

「ええ、貴女が彼女とやったのと同じ勝負よ。」

「闘いですか。いいですよ。」

「それじゃあ早速行きましょう。」

「妹さんが裾をつまんでますよ?」

「え?あ!!」

「えへへ。」

彼女は『古明地 こいし』  
さとりの妹である。

## 【第十九話】無我の境地

「さあ、ここら辺でいいわ。」

「はい、それではどうぞお手柔らかに。」

着いたのは玄関のホールだ

そこに2人は2〜3 m程離れて向かい合った

「あの鬼を倒した程の実力……。それに、こいしを視認出来た……。

油断出来ないわね……。」

「それでは行きますか？」

「ええ。」

「では、何処からでもどうぞ。」

そう言い彼女は何時もの両手をだらんと下げた脱力した姿勢になった

「（構えないなんてなめられたものね。）」

そう思いながらジリジリと詰め寄る

そして手が届く距離まで近付いた

「（彼方から動く気配は無いわね。」

ならこの距離から鳩尾に思い切り突きをいれてあげるわ!!」

そして彼女は渾身の力で突きを放った

しかし

「ほいなあ!!」

「いつ!?!」

気付いた時には彼女の身体は宙に浮きながら時計の様に回転していた  
そして彼女は頸から床に落下した

「がっ!!」

「ほれほれ、どうしました?」

「い、一体何が!?!」

彼女はガバツと起き上がり、目を白黒させながら彼女の方に向いた

「確かに触れた!! だけど触れた直後に私の体が宙を舞っていた!!」

「一体どうやったの!?!」

「なにボサってしているんですかい?」

彼女があれこれ考えている時に彼女が足をパシツツと足で叩かれた  
すると

「うっ!?!」

ガクンと彼女の姿勢が崩れた

そしてその場にぺたんと座り込んでしまう

「え? え?」

「ははは、貴女には理解出来ないでしょうな。」

「(な、なに?! 軽く足を蹴られただけなのに全身の力が抜けた?!)」

「ほれ、どうしました? 手を貸しましょうか?」

「え?」

彼女が手を差し出してきた

「くっ…!!」

屈辱的なことをされ、眉間にしわを寄せつつも彼女の手を

掴んでしまった

「あいよっ!!」

「へっ!?!」

素っ頓狂な声をあげて彼女は床にへばりついた

手を見ると彼女の手が自分の手首に絡み付くように引つかかっていた

「いだだだだだ!!」

「はっはっは、痛いなら離せばいいじゃないですか。」

「痛い痛い痛い!!は、離れない!!?何で!!」

悶えるが一向に外れる気配が無い

「はっはっは。まだまだですねぇ。」

そう言い彼女の方から技を解いた

「———っっ!!」

彼女は手首を抑えて素早く彼女から距離をとった

「(一体何なの!?!さつきから全然私の攻撃が入らない!!」

それになに!?!この人全然心が読めない!!)」

そして彼女は自分の言葉に疑問が浮かんだ

「(え?心が……読めない?)」

彼女は無意識のうちにポカンとした顔になり、彼女を見ていた

「(心が読めないって……え?なんで?)」

彼女の能力は相手の心を見通すものだ

しかし彼女は彼女の心を読めなかった

見えないのだ

「(なんなのこの人……?)」

心が真っ白で……。なにも無い……。

さつきからずつとそうだった…。

この人、動く時、話している時、常に心が真っ白で何も無かった。」  
そして彼女はハッと気付く

「もしかして……。」

これが……。

無我の境地……？」

無意識のうちに彼女の考えていることは声に出していた

その言葉を聞いて彼女がにやっと笑った

「御名答です。」

合気道において最も大切なのは『心を無にする』ことなんです。

心を無にすることで自然体が出来、あらゆるものに反応出来、あらゆる攻撃を流すことが出来るんです。

無心になっていれば行動を先読みされることもありませんからね。

よく合気道をやっている人がチンピラなどにやられていているものがしばしば見られますがあれらの敗因は無心になっていないからなんですよ。

『ああしてやろう』『この技をかけてやろう』『これが効かなかったらどうしよう』などと考えていると自然体が出来ません。

そして何よりもわかりやすい敗因は『構え』をとっているからです。確かに合気道には構えがあります。

このように足を半歩前に出し、手を開いて両手を前に出したものがあります。

ですがこの構えは『実戦で絶対に使ってはいけない』ものなんです。

構えをとるとどうしても力が入ってしまいますし、あちこちに死角が出来てしまいます。

これではどうしても捉えられる攻撃も捉えられませんよ。

それにこの構えはただの『基本技をかける時の形』です。

よく合気道の演武などをみてインチキだの『実戦であんな動きは通用しない』だのいう方が多いですがあれはただの『基本技』です。

合気道は役に立たないと思っっている人のほとんどは『基本技を実戦で使う』と思っ  
ているからです。

実戦で基本技は使いません。

実戦で使うのは基本技を『応用』した技です。

正確には『決まった技』ではないですけど。

極端に言えば『基本技の原理を利用したその場しのぎ』です。

合気道の実戦はこれを使います。



実戦で基本技で挑む方はただのお馬鹿ですよ。

基本技を実戦で使うと思っている方もお馬鹿ですが。

さて、では正しい構えは何か？ですが。

合気道の本当の構えは『脱力』です。

極端に言えば『棒立ち』です。

何も考えず、力を入れず、無心になるのが合気道の構えです。

これこそが最も強い構えでもあります。

ですがこれは『修行した人だけが出来る』ものです。

なんの修行もしていない人がこれをやってもただの案山子にしかありません。

合気道家の方がこれで相手の攻撃を見切れるのは『身体が反応する』からなんです。

考えて反撃してはいけません。

勝手に身体が動くようにならないといけません。

まるで自分の身体自身が意志を持っているようにね。

これが出来なきや無心になつたつて避けられませんですよ。

ただ殴られに行っているだけですよ。

殴られに行くのではなく『殴らせ』ないといけません。

そしてその攻撃に自然に反応出来てこそ本当の無心です。

無我の境地に達することが武術において最も大切です。」

「……、お見それしました……。」

彼女は深々と土下座した

額を床にくつつけた完全に屈服した土下座だった

## 【第二十話】 帰宅

さとりりに勝利し、数十分後

「ふう…、さてそろそろ帰りますか。」

「もう少しゆっくりしていても良いのよ？」

「いえ、私を待つてる方がいますから。」

お茶を出されて、それを飲み終わると席を立つ

「文さんも撮りたいものは撮れたでしょう？」

「ええ、まあ。」

「それでは送って行ってください。」

「はい。」

「よかつたらまた来てください。」

「はい、機会があったらまたいつか。」

そう別れを告げると2人共猛スピードで帰っていった

「もう帰っちゃまったのかい？」

「あら、起きてたのね。」

後ろから勇儀がふらりと出てきた

「今さつき帰りましたよ。」

「そうか…。」

いつかまた勝負をしたいねえ…。」

「そうね…。」

2人共上を見上げてそう思った

「それでは、ご協力ありがとうございました。」

「はい、良い記事出来るといいですね。」

「ははは、それではまた今度。」

紅魔館の前に降ろしてもらい、別れを告げる

「さて、大分日が暮れてましたね。

皆さんただいま帰りました。」

しかし返事が聞こえない

「ふうむ、皆さん中ででしょうか？」

彼女が門を通り過ぎた直後

「隙ありい!!」

「ふっ!!」

ドンッ

「おえっ!!」

突如、彼女の背後から美鈴が飛びかかってきたのだ

しかし彼女は飛びつく瞬間に後ろに背中を突き出し、彼女の胴体に見事クリーンヒットする

すると彼女は肺の空気を全て押し出され、仰向けにぶっ倒れた

「ははは、隙ありとよく言えたものですね。」

「ゲホッ!!ゲホッ!!ははは…。」

咳き込みながら苦笑いをする

「ほれ、手を貸しますよ。」

「どうもすみません…。」

ギユ

グリッ

「いだだだだだ!!」

「はっはっは、警戒心が無き過ぎですよ美鈴さん。」

小手捻りをくらい、美鈴は地面に這いつくばる

夜、風呂場にて

「いやあ、意外にもちゃんと浴槽があつたんですね。」

「はい、一応お嬢様は浴槽がある国出身だと思つたので。」

美鈴と瀬賀とで一緒に風呂に入っている

「先生つて身長割には意外と体つきがしっかりしてますよね?」

「ええ、一応これでも武道家ですからね。」

元々柔道もやつてましたから多少は筋肉質ですよ。」

「へえ。」

ところで先生。」

「なんですか?」

「何時になつたら私に修行をさせてくれるんですか?」

「一応弟子になつたんですし。」

「もう既に始めてますよ?」

「え?」

「合気道に必要なものはなんですか?」

「え? え〜つと…。」

「相手の氣を読むことです。」

「え?」

「簡単に言えば『相手の行動を読むこと』です。」

「なるほど。」

「例えば私が喉が渴いたと言いますね?」

「何が飲みたいと思つてます?」

「え?」

「え〜つと、水ですか?」

「緑茶です。」

「は、はあ。」

「では私は今から何をしたいと思います?」

「え? わかりません。」

「正解は風呂から上がるです。」

「あつ、はい。」

「このように日常的なことでも相手の行動を読めるようにならないといけません。」

合気道の開祖の方も行動を読めるようにするために弟子達に自分の世話をさせたと言います。

「こんな言葉を知ってますか？」

「なんですか？」

「『歩けばそれ即武道』です。」

「それってどういう意味ですか？」

「武道家にとっては『毎日が闘いの舞台』というわけです。」

スポーツ格闘技では『ステージの上だけが闘いの場』です。

しかし武道家は『常に闘いの舞台の上にいる』のです。

武道家は『通り魔に遭っても文句は言えない』のです。

武道家は常に闘えるようになってくなくてはいけないのです。

世の中誰でも正面から挑んできてくれるとは限りません。

だから相手の行動を読むのは『闘いの時だけ』ではなく『日常の行動も』読まないといけないんです。



闘いの時だけ警戒していても不意打ちをくらっては意味が無いですからね。」

「なるほど。勉強になりました。」

「だから貴女にはしばらく私の世話、付き人をしてもらいますよ。」

「は、はい!!」

## 【第二十一話】修行

翌日

「さてと、美鈴さんおはようございます。」

「あ、先生。おはようございます。」

「…。」

「な、何ですか？」

彼女をじーつと見つめる

「はあ…、美鈴さん、何か忘れてませんか？」

「え？何ですか？」

「靴ですよ靴。私の靴。」

「ここに來てからずっと私は裸足でいたんですよ？」

「あ!!ごめんなさい!!直ぐ持ってきます!!」

「やれやれ。」

「いただきます。」

朝食の時間になった

「…。」

「ど、どうしたんですか？」

「箸がありませんね。」

「あ!!ご、ごめんなさい!!」

「ふう…。」

買い物にて

「…。」

「どうしたんですか先生？」

「歩幅を合わせないんですね。」

「あ!!」

そして彼女は何かと難癖をつけられまくった

何十、何百と

そんな生活が続くこと一ヶ月

「先生!! いい加減まともな修行をさせてくださいよ!!」

「ほお、つまり今までのは無意味と?」

お茶をすすりながら彼女と話す

「こんなお世話なんかして意味が無いでしょう!?!」

「ほほお。」

「ほほお、じゃなくてですねえ!!」

そう怒鳴った瞬間、彼女が湯のみを投げたのだ

「危な!?!」

「ナイスキャッチ。」

「ナイスキャッチって何するんですか!?!」

「どうですか? 突然の物事に反応出来るようになってませんか?」

「え? あ、確かに...」

「修行のおかげで反応が敏感になったからですね。」

「あ、その...はい...」

「はい、だけですか?」

「ごめんなさい先生。」

「うん。」

さて、まともな修行ですか。

じゃあ、稽古でもつけてあげましょうかね。

「は、はい!!是非お願いします!!」

「うむ。」

中庭にて

「さて、まずは準備運動ですよ。」

「はい!!」

「まずは手首足首をよく曲げて。」

「はい!!」

「次はアキレス腱を伸ばして。」

「はい!!」

「前屈、背伸び。」

「はい!!」

「指をよく曲げて。」

「はい!!」

「正座と起立を素早く繰り返して。」

「は、はい!!」

「股関節を180°開いて。」

「は、はい!! いてててて!!」

「首を回して。」

「はい!!」

「身体を捻って。」

「はい!!」

「荒ぶって。」

「はい!! っって荒ぶる!?!」

「はい、こんな感じ に!!」

そう言うのと彼女は奇声を発しながら両腕両足をブンブンと振りまくった

「せ、先生!?!」

「さ、美鈴さんも。」

「え、え。わかりました…。」

「さて、準備運動はこの程度でよしとしましょう。」

「は、はい…。最後の凄い疲れました…。」

「でもあれ大切な運動なんですよ。」

見た目は変ですが瞬発力、柔軟性、肺活量、精神、を鍛えたり慣らしたりしますし、無呼吸運動を長時間続ける訓練にもなってますから。

あのような滅茶苦茶な動きでも十分意味はあるんですよ?」

「は、はあ…。」

「じゃ、次は稽古を始めますね。」

「は、はい!!」

## 【第二十二話】四方投げ

「さて、稽古…つといきたいところですが、まずは相手を探しましょう。」

「え？先生がやるんじゃないんですか？」

「私じゃ小さすぎるでしょう。まずは体格が近い方とやった方がいいですよ。」

「はあ…。」

そう言い彼女は何処かに行く

しばらくして人を連れて戻ってきた

「では美鈴さん、まずはこの方を相手にして練習しましょう。」

「え！咲夜さんが相手ですか!？」

「はい、体格が近く、強いのはこの方ぐらいですから。」

「美鈴、やり難いかもしれないけど弟子になったからにはやり遂げなさい。」

「さ、咲夜さん…。」

わかりました!!では先生、まずは何をやればいいんですか？」

「はい、では四方投げをやってもらいます。」

「四方投げ？」



「はい、咲夜さん、ちょっと私を殴ってください。  
遠慮は要りませんよ。」

「…わかったわ。」

はっ!!」

彼女の拳が彼女の顔面に触れる瞬間、彼女の拳は空を切った

するといつの間にか手首、前腕を彼女に掴まれていたのだ

だが彼女にははつきりと認識出来ていなかった

瞬きほどの短い時間の出来事だったからだ

彼女には『握られた』ということにしか気付けなかった

その握られた直後、彼女は腕を掴んだまま体を半回転させながら彼女の腕を真っ直ぐ

に上に上げた

すると彼女の上半体は仰け反り、腕は背中側に曲げられていた

そして彼女が僅かに弾みをつけて彼女の背中側に腕を引っ張ると彼女の身体は後方

宙返りのように宙に舞った

そして彼女は地面に叩きつけられた

この間実に1秒程であった

「——っっ!!」

彼女は腕を押さえ、痛みのあまり苦痛の表情を浮かべる

受け身を取らなかつた為、肘を痛めたのだ

本来なら腕がとんでもない方向に捻じ曲がっている筈だが、身体が柔らかかつたおかげか痛めただけで済んだようだ

「さ、咲夜さん大丈夫ですか!？」

「だ、大丈夫…よ。」

「おや、受け身を取つてくれると思いましたがやはり武術の経験が無い為、取れなかつたのですか。」

でもよかつたですよ、貴女の身体が柔らかくて。

私の弟子の一人はこれで腕が取れちゃいましたからね。」

「え、今なんて?」

「ですから腕が『もりっ』と取れちゃつたんですよ。」

まるで手羽先みたいに。

上腕の骨の端が肘から綺麗に飛び出しましたよ。」

「え。」

「まあ、その方はなんとか手術で腕は治つたみたいですけど。」

まあ、思い出話は置いて、美鈴さん、形は大体覚えましたか?」

「え、あつ、はい。」

「では四方投げをまずは見様見真似でやってみてください。」

「は、はい!!」

「まずはゆっくりやりましょうね。」

「じゃあ、美鈴、行くわよ。」

「はい。」

そう言い彼女は拳をぬくつと突き出す

そして彼女はその腕を掴み、身体を半回転させる

が

「ん? うっ!!」

彼女は力を入れるが彼女の身体は一向に仰け反らない

「さ、咲夜さん!?! 力入れてませんか!?!」

「そりゃあ入れてるわよ。」

「さつきはあつさりやられてたじゃないですか!!」

「さつきだつて力を入れていたわよ。」

「でも…。」

一呼吸おいて彼女は再び言う

「さつきは『力を抜かれた』のよ。」

「はい?」

「美鈴さん美鈴さん。」

「なんですか?」

彼女が近付いてきた

「はい。」

「うっ!!」

「え?」

彼女が美鈴の腰を両手でグツと押さえると途端に咲夜の身体がガクンと仰け反った  
すると美鈴は呆然とした顔をする

「え、あの、え?」

「貴女は『中心力』がなってませんね。」

## 【第二十三話】 中心力

「中心…力？」

「はい、貴女には中心力がありません」

「中心力って何ですか先生？」

「ふむ、簡単に言えば、『身体の正中線及び頭頂部から股の間までの線を真っ直ぐに保つこと』ですね」

「中心線を保つとどうなるんですか？」

「筋力を最大に発揮出来ます」

「にっこりと言う」

「でも簡単なことじゃ無いんですよ？」

大抵の人は自分で身体を真っ直ぐにしたつもりでも何処か歪んでるものです

ですが完璧に真っ直ぐに出来ると力が漲り、ちよつと力を入れただけでも相手を倒せるようになるんですよ」

「へえ、でもどうすれば中心力をつけられるんですか？」

「うーん、練習しか無いですね」

「どうすればいいんですか？」

「合気道の稽古での構えは覚えていますか？」

「え？はい」

「あれをやってください」

「え、こうですか？」

「言われた通りにやる」

「ふうむ」

「背筋をもうちよつと伸ばして」

「はい」

「重心をちよつと前に」

「はい」

「力を抜いてください」

「はい」

「ん、もうちよい腰を前に」

「こうですか？」

「うんうん、いいですよ」

「ではその感覚を覚えてください」

「え、は、はい」

「じゃ、真っ直ぐ立ってください」

「はい」

「さっきの姿勢をやってください」

「はい」

「ほお、凄いですね」

「たった一回で姿勢を覚えられるなんて」

「え？そですか？」

「じゃあ、その感覚を保ったまま適当に歩き回ってみてください」

「は、はい」

「おお、凄い

「中心力をものにしてしまっている」

「え？本当ですか？」

「ええ、ではその感覚を保ったままもう一度彼女に四方投げをしてください」

「は、はい」

「流石に肘が痛いわよ…」

「行きますよ咲夜さん」

「はいはい」

先程と同じように技をかける

すると

「うっ!!」

「おおっ!!」

なんと綺麗に技が決まった

「凄いですよ先生!!私、ほとんど力を入れたつもりが無いのにコロツと咲夜さんを投げられました!!」

「ほお、凄いですね」

四方投げをたった数分で出来るようになってしまふなんて」

「えへへ、でも何で出来るようになったんです?」

あの構えは役に立たないんじゃないんですか?」

「確かにあの構えは実践で役に立たないです」

ですがね、あの構えは『中心力の養成』の為の構えなんです」

「え?」

「合気道の稽古で使う構えのほとんどは『中心力』や『集中力』や『呼吸力』などの鍛錬



に使うもので、戦いに使う構えじゃないんです

座り技というものがありますが、あれは戦闘技術を磨く為のものではなく『膝や足の指の鍛錬』に使うものなんです

まあ、戦闘にも応用さえすれば使えますけどね」

「つまり稽古で使っているのは『隙などを無くす戦闘時の構え』ではなく『戦闘で使う能力の鍛錬』の為の構えなんですね？」

「正解!!」

凄いですね、なんて読み込みが早いんでしょう」

「いや、それほどでもない」

そう言い頭をポリポリと掻く

「(この人なら合気道を完璧に熟せるかもしれないですね…)」

## 【第二十四話】基本

「さて、中心力を扱えるようになりましたし、稽古の続きをやりましょうか」

「はい!!」

「では四方投げをやってください」

「え? また四方投げですか?」

「はい」

「他の技はやらないんですか?」

「やりませんよ」

「え」

「四方投げというのは合気道の技で『最も重要な技』なんです

四方投げは中心力やタイミング、投げ方など合気道の理合を多く含んでいます

四方投げが出来るようになるということは『合気道の理合の大半を覚える』という意味です

自在に四方に投げられるようになればその技術をほとんどの技に応用できます  
わかりやすく言えばそうですね

四方投げを『算数』として、他の技は『数学』ですね

四方投げは合気道の技の『基盤』となるものですね

基本中の基本と言ってもいいでしょう

とにかく四方投げさえ覚えれば他の技を覚えやすくなるんです

「へへ、じゃあ四方投げをやりまくればいいんですね？」

「はい」

「よろつし、咲夜さん行きますよ〜？」

「ええ（腕が保つかしら…）」

「あ、技は左右均等にやってくださいね

片方だけやると身体が歪んでしまいますから」

「はい!!」

「（両腕か…）」

稽古をすること3時間

「はい、休憩しましょう美鈴さん」

「ふう…はい先生」

「咲夜さんもお疲れでしょう、休んだほうがいいですよ？」

「え、ええ…そうするわ…」

彼女は疲労困憊で肩で息をしている

対して美鈴は全く息が上がってない

「不思議なものですね、3時間もやり続けていたのに全然疲れてませんよ」

「ほお、呼吸のリズムまで覚えてしまいましたか」

「呼吸のリズム？」

「ええ、合気道では呼吸のタイミングが重要です」

合気道では技をかけた後、攻撃を避けたりする時に特定のタイミングで息をする必要  
があります

このタイミングを完璧に覚えると『長時間の運動をしても息が上がらない』のです  
身体が『落ち着く』タイミングで息をしているわけですからね

このタイミングがズレると身体に負担がかかり、息が上がってしまいます」

「へえ、先生も息が上がったことありませんでしたよね」

「ええ、ですが貴女ほど上達は早くないですよ」

「え？早いのですか？」

「確かに合気道の技はコツさえ掴んでしまえばたった数分で体得できますが、貴女は数

分もかからず、たった2〜3回で覚えてましたよ?」

「え、私は気付きませんでした」

「あら、そうですか」

でも無意識に行動できていたってことは自然体も作れていたでしょう

まったく大した人ですよ貴女は」

「いやあ、そんなことないですよ」

少し照れ臭そうにする

「(本当に凄い、これは格闘センスによるもの…

いや、センスではないですね、この人は身体で動いている

肉体自信が理合を覚えている…)」

## 【第二十五話】集中の力

「さて、次は合気道で大切な『集中力』の稽古をしましょう」

「集中力ですか…（これを体得すれば先生に大きく近づける!!）」

ゴクリと唾を飲み込む

「ではお手本を見せますね」

美鈴さん、咲夜さん、私の胸倉を掴んでみてください

「え？」

「はあ、こうですか？」

「はい、しっかり掴みましたね？」

2人とも片手で同じところを掴む

「それではいきますよ？」

そう言うとき彼女は2人の前腕に手首を引つ掛け、内側に押す

すると

「おっ!?おっ!?おっ!?」

「えっ!?ちよっ!!」

2人共内側に纏められ、ぶつかりながら地面に倒れる

「どうですか？これが集中力です」

「はえ、確かに踏ん張っていたのに全然抵抗できませんでした」

「でしようね、集中力を使えば2人でも3人でも相手にできますよ？」

「うっそ」

「まあ、美鈴さんなら簡単に出来てしまうかもしれないね」

「え？」

「でも相手がもう1人いないと出来ませんね、私じゃ力不足ですから

まあ、1人でも出来ますか」

「え？」

「それでは美鈴さん、咲夜さんの手を持ってください」

「え、あ、はい、こうですか？」

「はい、それで咲夜さんの掌が上に向くように外側に捻ってください」

「こうですか？」

「はい、それで手首を曲げて、下に押すように力を入れてみてください」

「ふっ！！んっ！！」

「崩れませんか」

では美鈴さん、中心線を保って手に意識を集中してください」

「はい、ふっ!!」

「うっ!!」

すると彼女はガクンと跪いた

「お見事、なぜ出来たかわかりますか?」

「え〜つと、集中力ですか?」

「はい、確かに集中力です」

では美鈴さん、集中力って何だと思えますか?」

「え、え〜つと…」

「はい、時間切れ〜」

「え〜…」

「集中力というのはですね、『中心線』を保ち、『全身の力を一点に集中させる』ことです  
重心が使う部位にかかるようにし、全身の力を一点に集中させるんです  
全身を使うことで一部だけ使うのより何倍も強力なんです

文字通り『集中』させることなんです」

「なるほど」

「ちなみにこの集中力、腕相撲などでも使えますよ?」



「え？どうやるんですか？」

「では美鈴さん、私の手を掴んでください」

「はい」

2人共互いに手を掴み、腕相撲の形になる

「では美鈴さん、私の腕を倒してみせてください」

「はい、うっ!!うううう!!」

力を入れるが彼女の腕は一向に曲がらない

「ほれっ」

彼女が力を軽く入れると彼女はあっさり負けた

「ええ、何でビクともしないんですか!?!」

「そりやあ美鈴さん、全身の力を使ってるからですよ」

「ええ」

「手首、肘、腕、肩、胸、腹、股関節、脚、指

全身の力を使い、一点に集中したことでこれだけの力を出せるんです

ちなみにこの技術は柔道でも使いますよ

集中力を理解出来たでしょうか？」

「はい!!ありがとうございます!!」

## 【第二十六話】呼吸力

「さてと、今日はここらで休みましようか」

「はい先生」

「これ以上は私の肘が持たないわよ…」

「咲夜さんお疲れ様、しっかり休んでおいてくださいね

明日もやりますから」

「え…」

「さ、中に戻りましょう」

夕食後

「先生、明日は何をやるんですか？」

「呼吸力の稽古をしようと思っっています」

「呼吸力？」

「はい、中心力、集中力と来て、次に来るのは呼吸力です」

「呼吸力って何なんですか？」

「集中力とタイミングを合わせたものです」

全身の力を一点に集中して使うのが集中力で、呼吸力は『相手の攻撃に合わせ、攻撃する時に集中力を使い、攻撃するもの』ってところです

次元で表すと『中心力Ⅱ一次元』『集中力Ⅱ二次元』『呼吸力Ⅱ三次元』みたいなものです

呼吸力は集中力にタイミングを合わせたものことですね」

「なるほど」

「美鈴さんなら出来ると思いますよ」

「そうですね〜？」

「はい、貴女には才能があるようですから」

「え、そうですね？」

「はい、あの短時間で集中力を体得しましたもの

きつと出来ますよ」

「そ、そうですね」

「さ、明日も早いですから休みましょう」

「はい!!」

翌朝

「さあ、今日もやりますよ!!」

「はい先生!!」

「ですが、咲夜さんがいませんね?」

「あく、肘の痛みが取れないみたいですよ?」

「あちら、靱帯を痛めましたか」

「困りましたね、誰か代わりはく…」

顎に手を当て考えこむ彼女達のいる紅魔館に人の少女が空を飛んできた

「ん? おや、誰でしょう?」

「あ!! あれは霧雨 魔理沙!! まさかまた本を盗みに!?!」

「おや、知り合いですか?」

「知り合いも何も、あいつはここ紅魔館の図書館の本泥棒ですよ!!」

「ほお、それはまた…」

「ちよつと懲らしめてきます!!」

そう言うのと彼女は空を飛び、彼女の元に行った

「こらあ!!」

「わ!!何時も寝てる筈の門番!!」

「ちよつと降りろ!!」

「何だよ」

「そう言い大人しく降りる

「何だよ、私は本を借りに来たただけだぜ？」

「嘘つけ!!借りると書いて盗むだろ!!」

「失礼だなく、死ぬまで借りるだけだぜ？」

「それを盗むと言うんだ!!」

「こらこら、喧嘩は駄目ですよ？」

「喧嘩をする2人の間に彼女が割り込む

「何だ?この小さいの？」

「こら!!この人は私の先生だぞ!!」

「先生?こんなのが?」

「あ、ちようどよかったですねこれは

美鈴さん、呼吸力の練習台をこの方にやってもらいましょう」

「あ、それはいいですね先生」

「??何の話しだ?」

「ではまず見本を見せますので見ててくださいいね?」

「はい!!」

「何だ?」

「え、つと、貴女、私を殴ってください」

「は?」

「いいから早く」

「よくし、何だかよくわからないがいくぜ!!」

腕を回し、一気に殴りかかった

それを彼女は体を回転させて、避ける

すると彼女の腕は彼女の前を通過する

そこに彼女が肘を彼女の伸びた肘に当てた

すると

「へ？」

彼女の身体は宙に浮き、飛び込んだように地面に突っ込む

「ははは、どうですか？」

「な、何したんだ!？」

「さあ、なんでしようね〜」

「さすが先生」

「さ、美鈴さん、稽古をしますよ」

「はい!!」

## 【第二十七話】魔法使いと武道

「さて、美鈴さん、先程見せた『肘当て呼吸投げ』をやってみてください」

「はい、相手はこの泥棒でいいですね先生？」

「はい」

「え、ちよつと…」

「えくつと、魔法使いさん、さつき私にやった様に殴りかかってあげてください」

「魔理沙だぜ、霧雨 魔理沙

殴ればいいんだな？」

「ええ、遠慮なく思いつきりと」

「よし、今度はやられない、ぜ!!」

そう言い、いきなり殴りかかった

「ふっ!!」

「うわっ!!」

彼女の拳を体捌きで避け、彼女の肘に肘を当てる

すると彼女は前に吹っ飛んでいった



「つてててて…」

擦りむいた肘を摩りながら起き上がる

「ほお…、凄いですね、たった一回で肘当て呼吸投げを体得するなんて…」

「そ、そうですか？」

「ええ、呼吸力を身につけ、利用出来る様になるには並大抵の人にはほぼ無理と言っているほど難易度が高いものです

それを貴女はたった一回で

やはり貴女には隠された才能があるのかもしれないですね」

「はあ…そうですか」

「それよりさつきから一体何だ？魔法か？」

「魔法…ですか」

チラツと美鈴と目を合わせ、プツッと吹き出す

「はっはははは、魔法なんかじゃないですよ

武道ですよ、武道

合気道という武道です」

「ふくん、で、その居眠り門番は何で一緒にやってるんだ？」

「弟子入りしました」

「ふうん、そんなの役に立つのか？」

「ほお、やられているのに役に立たないと…?」

「ああ、弾幕はパワーだけ!!素手で勝てるわけないだろう」

「ほお、では試してみますか？」

「いいぜ、後悔するなよ?」

「ええ、貴女こそ」

そして2人は広場に出て、3〜40m程離れて向かい合った

「さあ、行くぜ!」

「どうぞお手柔らかに」

「先手必勝!!」

そして彼女は無数の弾幕を彼女に飛ばした

何百という弾幕が飛ぶ

しかし彼女は

「(偽物ばっかり)」

彼女はゆつたりと彼女に向かって真つ直ぐ歩いていった

「これだ!!」

そう言い、彼女は首を右に傾けると彼女の顔ギリギリを弾幕が通過した

「はっはっは、下手な鉄砲を数撃つてもそうそう当たりませんわ」

「(凄い、あの弾幕の嵐の中、あんなに落ち着いていられるなんて)」

美鈴が彼女を真剣な顔で見つめる

「く、くそお!!何で当たらないんだ!?!」

「ふむ、この光の球つころの軌道には規則性がありますね

それに、貴女は私に集中して狙いを定めていない

単純な軌道ですから避けるのは簡単でしょう」

顎に手を当てて解説する

そして彼女と魔理沙の距離は3mを切った

「なら、これならどうだ!!マスターズパ——」

彼女が叫びながら、懐から『ミニ八卦炉』を取り出し、彼女に突き出す様に向けた瞬間

彼女の体は前につんのめった

「は」

声を上げる間も無く彼女の視界は一瞬の内にひっくり返った

彼女の肘が彼女の顎に当たり、後頭部から地面に倒された

「え、えつと…」

目をパチクリさせ、空を見上げながら何が起きたのか整理しようとするが何が起きたのか彼女には全くわからなかった

『側面入り身投げ』ですよ」

「は？」

「貴女がこの…何でしょうこれ？まあ、これを私に向けた瞬間にその腕を引っ張って前につんのめさせ、そこに腕を当て、後ろにひっくり返らせただけですよ」

「へえ…わからないぜ」

「ははは、それより、役に立つことがわかりましたか？」

「あ、ああ、わかったぜ」

## 【第二十八話】 打撃

「なあ、1つ聞いてもいいか？」

「はい、何でしょう？」

「その、なんだ？合気道つてのはあれ、投げ技が主体みたいだけどそんなので相手を倒し  
かれるのか？」

「ふむ、確かに合気道で目立つのは投げ技が多いですね

ですが、実戦における合気道は『当て身が七割、投げが三割』です」

「へえ、でもその体つきからみて当て身はあっても打撃は無いだろ？」

「ありますけど？」

「え？」

「まあ、ボクシングや空手の様な派手な打撃はあまり無いですけどね」

「へ、へえ、そんな細い体で相手を倒せる打撃があるのか？」

「まあ、ありますね」

「うそ……」

「じ、じゃあやって見せてくれ」

「はい、じゃあいつもみたいに殴ってください——」  
「ほら!!」

言い終わる前に彼女が殴りかかった

しかし

殴りかかった瞬間、彼女の体は前につんのめり

それとほぼ同時に彼女の視界が白く光った

「~~~~んん!!」

気がついたら地面で顔を抑えて翻筋斗打っていた

「せ、先生!?!い、今どうやって?」

「ふむ、『裏拳』がもろに入ったみたいですね」

「う、裏拳?」

「うくん、急に来られたから自分でもよくわかりませんね

まあ、おそらく

魔理沙さんが私に殴りかかってきたので私はそれを入り身で捌き、目標を失った突きを引つ張って体を前につんのめらせて、顔が前に来たのと同時に裏拳を打ち込んだのでしようね」

翻筋斗打っている彼女の顔と手の間から血が流れ出た

鼻が折れたのだろう

「で、ですが先生

そこまで力がある様に思えません…」

「そうですね」

確かに『空手などで使う打撃』だったら筋力が無いと相手を仕留めるのは難しいでしょうね

しかし、私がやったのは『合気道での打撃』です

合気道は力を必要としません

力を使わず相手を倒すものですから打撃も組みも投げも全部力を使わず相手を即座に倒せます

何故出来るかというと、やはりエネルギーの効率ですかね」

「エネルギーの効率？」

「はい、合気道は如何に力を無駄なく伝えるかが大切です

全身の力を集中力で拳に集め、打ち込めば弱い力でも絶大な威力を発揮します」

「ではどうやったのですか？」

「まあ、簡単です

裏拳で大切なのは合気道で重要な『肘の固定』です」

「肘の固定?」

「はい、肘を突き出して、肘をブレさせずに腕を回転させれば大きな力を発揮します  
金槌の柄の中心を持って回すのと端を持って回すのと同じ違いです

肘がブレると力が散ってしまうんですよ

で、肘を固定、重心を使い、全身の力を拳に集中させるのです

こうすることで弱い力でも絶大な威力を発揮できるんです」

「ほお」

「ふむ、じゃあ次は『突き』についてちよいと説明しましょうか」



## 【第二十九話】 膝と突き

「さてさて、合気道における突きを教えましょうか」

「はい先生」

「合気道で突きと聞くと『入り身突き』が思い浮かぶ方が多いかもしれませんが、合気道にも空手の様に突く技もあるんですよ」

「へえ〜」

「と言ってもボカスカ殴打するわけではないんですよ

まず、見てもらった方が早いでしょう

魔理沙さん、ちよつと受けてもらっていいですか？」

「え、私がか？痛いのは嫌だぜ」

「まあ、そうおっしやらずに

優しくしますから」

「う、まあ、ちよつとだけなら…」

「じゃあ行きますよ？」

まずは空手などの正拳突きです

はっ!!

「うっ!!」

正拳突きと言つても加減するために掌底打ちで彼女の右脇腹  
肝臓のところを突いた

「も、もうちよつと加減してくれよ」

「じゃあ合気道の突きを行いますよ?」

「お、おう…」

そう言つと彼女は同じく掌底を使った

しかし

「おえっ!!」

彼女がさつきとは違い、2 m近く後ろに吹っ飛んだ

「ははは、如何ですか?」

「ゲホッ!!ゲホッ!!なんだ今の!」

まるで大きな岩が突つ込んで来たみたいな衝撃だぞ!」

「はっはっは、さて美鈴さん

何故こうなつたか、違いがわかりますか?」

「う、うん

最初の突きは腰が入ってましたしく、んく？」

「ふっふくん、答えは重心と集中力です」

「え？」

「合気道における突き」

それは『重心を前の膝に乗せる』んです

空手の突きとの違いはそこです

それに集中力をプラスしたんです」

「は、はあ

で、でも先生

合気道では巻藁を叩いたり、瓦を割ったりするんですか？」

「あつはつはつはつは、美鈴さん、合気道でそんな無意味な鍛錬はしませんよ？」

「え、無意味？」

「美鈴さん、人はどれだけ頑丈か知ってますか？」

「え、それはその…」

「ブロックを割る様な突きで人は破壊出来ません

では如何すれば人を倒すことが出来ると思いますか？」

「えくと…」

「答えはダメージです」

「ダメージ、ですか？」

「ええ、人は壊そうと思つて壊せるものじゃありません

如何に肉体にダメージを与えるかが大切なんです

例えばこれ、何だと思えます？」

「そう言い、握り拳をみせる

「正拳、ですよね？」

「ではこれは？」

「一本拳じゃないですか、それがなにか？」

「じゃあ見ててください

「魔理沙さん、行きますよ？」

「え、あ、お、おう」

「そう言うのと一本拳でさつきとは同じ突きをした

すると

「おえああっ!!」

「同じく彼女は吹っ飛んだ

しかしその後が違った

「んーーーーー!!し、死ぬ!!があああ!!」

彼女は腹を抑え、地面を翻筋斗打っていた

「さ、違いはわかりましたか？」

「え、えつと、一本拳だからその…、確かに与えるダメージは大きいと思いますが」

「一本拳でブロックを割れますか？」

「む、無理です」

「そう、人体とブロックは違うんです

ブロックは力さえあればいくらでも破壊出来ませんが、人体は力任せに殴打しても中々ダメージは入らないものなんです

突きには『生物への突き』と『非生物への突き』の2つがあるんです

空手で使う突きはの大半はブロックなどを破壊する頑丈な突きです

しかし合気道は『人体の奥に浸透させる』突きを使います

そうですね、わかりやすく例えると

空手は『叩く』、合気道は『刺す』という様な感じですよ

表面的なダメージを与える空手に対して

合気道は内部にダメージを与えます

だから痛いんです」

「なるほど、要するに力を狭い面積に集中させ、かつそこに体重を乗せるんですね？」

「はい、しかしちよびつとだけ違いますね」

「え？」

「確かに狭い面積に体重を乗せた突きを打ち込むのは合ってます

しかし、それは空手でも同じです

違うのは『重心の移動』なんです」

「はい？」

「空手は足から腕まで連動させて体重を乗せます

しかし合気道では全身ごと動かし体重を乗せます

この違いがわかりますか？」

「う、うーん」

「そうですね、大雑把に言うくと

空手は『バットのスイング』

合気道は『タツクル』といったところでしょうか」

「は？」

「私の動きをもう一回見せますからよく見ててくださいね」

そう言いさつきの突きの動きを見せる

「ん〜？」

あ!!後ろの足にほとんど体重が乗ってませんね!!

前の足に体重が乗って、かつ全身の力が拳に集中してますね!!」

「うんうん、つまり、飛び込んでる様な感じですよ」

じゃあ、違いを体感してみましよう」

「え？」

「じゃあ私が貴女の胸を腕で突き飛ばしますね？」

行きますよ」

「は、はい」

まずストレートの様に腕を突き出し、押した

「うっ、うん、中々の衝撃ですね」

少し踵が浮いたが楽に踏ん張れるほどだった

「じゃあ合気道の突きをやりますね？」

「は、はい」

同じく受けた

すると

「いっ!?!」

彼女の体浮き、後ろにぶっ飛んだ

「す、凄い!!なにこの衝撃!」

「ははは、如何ですか?」

合気道のこの突きは、相手が肩を突き飛ばしに来たのに合わせて体を突き出し、相手を弾き飛ばすのや

背後から飛びついて来た相手に合わせて弾き飛ばすのと同じような感じですよ  
大男相手でも結構吹っ飛びますよ?

まあ、吹っ飛ばすだけじゃなくダメージを与えるのも大切ですけどね  
その為に私は一本拳をよく使います」

「なるほど、しかし如何やって練習しているんですか?」

「美鈴さん、合気道の基本の構えを覚えてますか?」

「あ、はい」

あの足や手や腰や頭などを一線上に結んだやつですよね?」

「はい、合気道の鍛錬であの構えから体を前に押し出す『臂力の養成』というものがあるんですか」

あれが突きの鍛錬にもなっているんです

合気道では突きを鍛えるのに拳をガチガチに鍛え上げるんじゃないんです



集中力、重心の運び方を鍛えることで突きが強くなるんです

まあ、多少は拳を丈夫にしていなくて打ち所によつては痛めますけどね」

「なるほど」

つまり合気道の突きは体運びによつて変わるわけですか

いや、他の武術とはまるつきり違いますね」

「ははは、そこが合気道の面白いところでもあるんですよ」

「いや、勉強になりました」

まさか拳を鍛えた突きと、体運びを鍛えた突きとでこんなに差があるなんて」  
「まあ、生物に対して有効な突きですからね

ちなみにこの原理はタックルをするようなスポーツでも役に立ちますよ

ラグビーとかレスリングとか」

「?何の話ですか?」

「天の声です」

「?」

## 【第三十話】達人の足

「さてと、今日はこれでおしまいです

ゆつくり休んでくださいね」

「はい先生」

「わ、私はもう協力したくないぜ……」

数時間稽古を受け、それぞれ戻った

部屋にて

「ところで先生、この前まではずっと裸足で外出しましたよね？」

「ええ、そうでしたね」

「足の裏つて、大丈夫なんですか？」

「はい、全然平気ですよ？」

「え、ちよつと見せてもらっていいですか？」

「はい、どうぞ」

そう言うのと彼女に足の裏を見せた

「うわっ、え、これっ、え？」

「如何ですか？」

「あの、何というか、見たこともありません」

「ははは、でしょうね〜」

彼女が見たのは足の裏

そう、足の裏なのだが異常だったのだ

殆ど土踏まずが無く、扁平足のような足なのだ

だが、ただの扁平足ではない

彼女の足はまるで、水銀の様な溶かしたアルミの様な

まるで宝玉とも言える程極めて滑らかな足なのだ

「最早、芸術の域ですよ…先生の足は…」

「ははは、そうですね」

私は毎日毎日、どんなところでも摺り足を欠かせません

そこいらの武術家よりもハイレベルな摺り足を何年も続けてきましたよ

おかげで磨きに磨かれた足になったわけですよ」

「いや〜、これは普通の人には出来ない足ですよ〜」

ちよつと触つてみてもいいですか？」

「はい、どうぞ」

「どれ…!?硬っ!!」

「ははは、私の鍛え上げられ足裏は骨にも勝りますよ」

「ま、まるで鋼鉄の真球!!」

「そうですね、私は動く時

まるで油の上を滑つてる様に滑らかな感覚ですね」

「それつて転ぶんじゃ…」

「ははは、バランスさえしつかり取れば目を瞑つても出来ますよ」

「それが普通じゃないんですが…」

あれ?あの先生」

「なんですか?」

「あの、先生の親指、何か変じゃないですか?」

「ああ、そうですね」

「何だか腫れてる様にも見えますけど…」

「それはタコ（肉刺）ですよ」

「へ?」

「私は親指の腹を中心に体捌きなどをしますからね」

特に鍛えられて大きな分厚いタコができちゃったんですよ」

「何故親指なんですか？」

爪先の方が広くて安定しますのに」

「広いからダメなんですよ

コンパスと同じです

細い方がよく食い込み、良く回ります

それに、集中力を生み出すのに一番大切なところですから」

「え？」

「集中力を生み出す時のスタート地点

それはこの親指です

この親指をうんと鍛えて、地面にしつかりと食い込ませます

そして膝のバネと共に跳ねさせ、上半身に力を流すんです

親指は体捌きにも攻撃にも大切なものなんです

この親指をしつかり鍛え、地面に食い込ませると腰にビーンという感覚がします

この腰にビーンという感覚が感じられなければいけません

この感覚がしてこそ集中力を完璧にものにできます」

「なるほど…親指はそんなに大切なものだったんですか」

「はい、合気道の極意は足にあります」

しつかりと鍛錬してくださいね」

「はい!!頑張ります!!」

「さ、そろそろ寝ましょう」

「あ、そういえばさつき咲夜さんに明日お使いをするよう頼まれたんですが」

「そうですか、私も行きますよ」

「え、いいんですか?」

「はい、暇ですから」

「そうですか、じゃあお休みなさい」

「はい、ぐつすり寝てくださいね」

そう言い彼女は明かりを消し、自分の部屋に行った

## 【第三十一話】愛弟子

翌朝

彼女達はお使いで早速人里に向かった

道中

「そういえば先生、先生って道場の師匠ですよね？」

「はい、そうですよ」

「じゃあやっぱり弟子とかいるんですよ？」

「はい、2〜30人程は」

「愛弟子とかいるんですか？」

「ん〜、いるちゃあいますね」

「2人程一目置いてる方がいますよ」

「どんな人ですか？」

「そうですね、2人共凄い実力者ですよ

樹村 政美（きむら まさみ）女性19歳

この人が色々と凄いんですよ」

「例えばどんなどころですか？」

「ん、この人は元

いや、今も柔道をやってる人なんですけどね、私のところで週2程合気道を学んでるんですけど

いや、この人は凄いですよ

全日本大会で6年間無敗で全ての勝負で総なめ

大外刈りが得意技らしいんですけど、いやあ、これが凄いですよ

この人が大外刈りを極めると皆んな頸椎損傷で

大抵の人は彼女が大外刈りを繰り返そうとすると自ら降参するんですよ

遂には大外刈り禁止令まで出たりと」

「へ、へえ、凄いんですよ」

「いやいや、この人の1番の特徴はそのパワーですよ

私のところの弟子が一度立ち会ってみたんですけどね

彼女は170cm70kgで、弟子の方は182cm90kgなんですけど



勝負が始まるや否や物凄い速さでお弟子さんの襟を掴むと、凄いスピードで腰投げを極めると床の畳が2つに折れちゃったんですよ

下の板も割れちゃって、床が抜けちゃったんですよね

そのお弟子さんは病院に搬送されて、一応一命は取り留めたらしいです  
他にもデモンストレーションで色々やって見せてくれたんですよ

瓶の王冠を指で外したり、障子を端を掴んで一気に潰したり、直径3cm程の鉛の棒をひん曲げたりと

とにかく力自慢の人なんですよ

で、なんでそんな人が私のところに来たかというところ

合気道の技術を柔道に活かしたいっていうんですよ

でも、最初は半信半疑だったみたいなので私と彼女とで勝負をしたんですよ」

「えい！だ、大丈夫だったんですか!？」

「はい、掴みに来たところを捌いて

四方投げを極めたんですよ

合気道の受け身を知らなかったみたいで、腕からブチブチと音が聞こえたんですよね  
多分、筋肉や筋が切れちゃったんでしょう」

「え……」

「それで、私の実力を認めたみたいで、私のところに通い始めたんですよ  
いや、凄いですよ

あつという間に合気道の体捌きを体得して、早速実践で使ってたんですよ  
で、実践で入身投げをしたらしいんですけどね

柔道に入身投げは無いので、審判が困っちゃって、変型の腰投げとかになっちゃった  
らしいです」

「は、はあ…」

「もう1人の方は

潮田 光三（しおた みつみ）女性16歳

私の1つ下なんですけどこの人が凄い!!

何が凄いかというと、とにかく瞬発力が凄いですよ

弟子の方達が組手をやってるのを見てるんですけど

お弟子さんがかかりに行くともう、いつの間にか捌いて技を極めてるんですよ

彼女は150cm40kgなんですけど、190cm100kgの警察の方をあつと  
いう間に降参させてしまったんですよ

少々力に任せたとところがあるのが残念なんですけどね

でも、技術も大したものですよ

先程の樹村さんと腕相撲をしたことがあるんですけど

これが全戦全勝でしてね

樹村さんが力を出すよりも速く倒してしまっているので、力自慢の樹村さんでも勝てなかつたんですよ

私の右腕に位置する方です

この人の志願理由は、私に勝ちたいからだそうです

私の目の前で「何時か貴女をぶん投げてみせる」って言ったんですよ、いや、この人とは闘いたくないですよ

私とほぼ互角になる程ですから

何時か免許皆伝するかもしれませんね

「ははは…凄い人ばかり…」

## 【第三十二話】実戦合気道

適当に喋ってる内に人里に着いた

「さてと、何を買いいに行くんですか？」

「え〜と…」

ささっと買い物を通し、帰ろうと人里の外に向かう途中

「おいてめえ!!」

「ん？おやおや、貴方はいつぞやの」

「この前はよくもやってくれたな!!ぶっ飛ばして後悔させてやる!!」

男が叫ぶ中、美鈴が割り込んできた

「待てえい!!」

控え控え!!この方を何方と心得る!!

この方こそ合気道の達人!!瀬賀 剛二三大先生であられるぞ!!

先生が出るまでもありません、私が懲らしめてやりますよ!!」

「おやおや、頼もしいですね」

ですが美鈴さん、勝てますかな？」

「え？」

そう言い彼女が指差した先からは男の仲間らしき男達がぞろぞろと出てきた

「え、あ、その…」

「誰が誰に代わって懲らしめるって？嬢ちゃんよ？」

「あ、あははは…」

無理無理無理無理無理無理無理！！

先生！！幾ら何でも無理ですって！！この人数は！！逃げましょうよ！！」

「ははは、何を言ってるんですか美鈴さん？」

実戦で多人数相手は常識じゃないですか

たかが7〜8人ぐらい倒せなくてどうします？」

「え」

「仕方ありませんね、私がお相手しますよ」

「いい度胸じゃねえか、野郎共！！やっちゃまえ！！」

《おとおおお！！》

「(さて、此奴らの用心棒格は…彼奴か)」

男達は彼女をぐるりと囲んだ

その中の1人に彼女は狙いを絞っていた

彼女から見て2時の方向の男だ

背丈は180cm程

この人里の中ではかなりデカイ方だ

「(ふむ、態度、呼吸、体つき、気配

妙に落ち着いている

戦い慣れたタイプだ、こいつが主戦力だな)」

彼女は両手をだらんと下げた、つまり自然体のままその男を観察した

そして急にその男に飛びかかった

「うっ!?!」

男のすぐ手前で彼女は立ち止まり

顎を突き出した

まさに「殴ってみろ」という様に

「てめえ!!」

男が殴ろうと思いい切り振りかぶった瞬間

「ほいっ!!」

彼女は男の顎と右肩の後ろに手を当て、地面に叩きつけた  
それも凄いスピードで

「がっ!!!」

男は後頭部を強打し、そのまま失神した

「て、てめっ!!!」

「野郎!!ぶっ殺せ!!!」

それを見て、他の男達が彼女に飛びかかって来た

正面と背後

二方から男が飛びかかって来た

そこで彼女は

「よっころしよ」

正面から来た男向かって、地面に四つん這いになり

男の足に肩を当て、足元を掬った

すると男は勢いよく前にすっ転び

挟み討ちになる様に来た男に頭から突っ込んだ

「おっ!!!」

「ぐはっ!!!」

転ばされた方の男は頸椎を痛めたようだ

もう一方の男は、水月に頭突きを食らったせい、過呼吸の様になり、翻筋斗打っている

彼女が起き上がると、木刀を持った男が飛びかかって来た

すると彼女は、振り下ろされた木刀をサツと体を横に倒して避ける

すると男の振り下ろした手が彼女の目の前に来た

すると彼女は

「ちよつくら借りますよん」

振り下ろされた木刀を握った手と手の間を掴み

弾みをつけて前に振ると

「うわっ!!」

男は前に吹っ飛び、地面を転がった

それと同時に、彼が持っていた木刀は彼女の手に

直後、彼女の横から木刀を持った男が飛びかかって来た

「この野郎!!」

そう言い男が木刀を振り被った瞬間

「サクツとな」



彼女が彼の喉を振り被るのに合わせて木刀で突いた

「おえっ!!」

男は後ろに吹っ飛び、後頭部を地面に打ち、そのまま失神した

そしてすぐさま彼女の背後から男が飛びかかって来た

さつき木刀を奪ってやった男だ

「いんにゃろ!!」

男が彼女に掴みかかりに行く

彼が彼女の胸倉を掴んだ瞬間

「ほいな!!」

彼女は彼が飛びかかって来た方向に体を回しながら跳んだ

すると男は彼女の回転と同じ方向に回転しながら吹っ飛んでいった

吹っ飛んでいった先には金物屋が

男は釘が大量に置いてあるところに突っ込んでいった

彼女は木刀を手放し、その直後

彼女の背後から男がヤクザキックを打ち込んで来た

すると彼女は体ををパツと回して躲す

すると彼女は男の突き出した脚の横に行き、男に背を向けた状態になった

そこで彼女は男の蹴り上げた脚の膝を手刀でポンと叩いた  
すると

「はっ!?!」

男はペシヤンとその場に座り込んでしまった

よく見ると男が蹴り上げた脚の膝があらぬに曲がっている  
折れているのだ

「おお、我ながら上手く極まりましたね」

彼女が顎に手を当てて満足しているところ

男2人が左右から彼女の肩を掴んだ

すると彼女は

「だあああっしや!!」

彼女は勢いよく半歩下がりながら体を前に倒した

すると

「おあっ!!」

「ふあっ!?!」

男達は前に吹っ飛んでいった

吹っ飛んでいった先には、さっきの金物屋が

「く、くそお!! 覚えてろよ!!」

さつき、膝を折った男が喧嘩をふっかけてきた奴だった

男は泣きながら這い蹲り、去っていった

「ふう、やれやれ喧嘩はするものじゃないですな」

「せ、先生凄いやあんなあつさりよ……」

「ははは、実戦で戦えなきや武術家の恥ですよ」

「ええ……」

そう言い、彼女にウィンクした

## 【第三十三話】 志願者達

男との喧嘩も収まり、再び帰ろうと歩いていると

「あの」

「おや?」

一人の青年が話しかけてきた

「何か用ですか?」

「はい」

あの、貴女が噂の合気道家って方ですよね?」

「はあ」

まあ、噂になってるかは知りませんが、私は合気道家ですよ?」

「やっぱり!!」

あの、よろしければ私にも教えていただけないでしょうか!」

「そうですね」

しばらく首を傾げた

一分程経って応えた

「教えたいたのは山々なんです、この人にも教えてますし…」

「あ、なら道場を用意してあるのでそちらで」

「え？道場があるんですか？」

「はい!!貴女の為に皆んなで用意しました!!」

そう言うのと彼の後ろからぞろぞろと人が出てきた

「皆んな貴女に弟子入りしたい人達です!!」

どうかよろしくお願いします!!」

《よろしくお願いします!!》

そう言い、全員頭を下げた

「ん、困りましたね」

美鈴さんはどう思いますか？」

ポリポリと人差し指で頭を搔き、彼女に聞く

「私は構いませんよ？」

何とかそこに通うように努力しますから!!」

「そうですか

じゃあ、その道場でしばらく生活させてもらいますね」

「はい、頑張ってください先生」

「はい

え、じゃあ弟子入りを許可します!!」

《よっしやああああ!!》

全員喜んで跳び上がった

「そ・の・ま・え・に

皆さんの志願理由を聞かせてもらいますよ」

《ざわ…ざわ…》

皆んな騒ついた

理由を聞かれるとは思わなかったのだろう

「ではまず貴方

何故合気道を学ぼうと？」

適当な中年の男性を指した

「えっと…その…

興味本位というか…何というか…」

「ふむ

では貴方は？」

今度は小柄な青年を指した

「僕はその…」

体が小さいから強くなろうと思つて…」

「ん〜」

じゃあ貴女は如何ですか？」

細身の女性を指した

「私は、護身用に覚えておこうかな〜つて…」

「ふむふむ」

んじゃあ、皆さんに言つておきますね

『合気道を悪用した者は厳しく仕置きします』

わかりましたね？」

「はい」

1人の男性が手を挙げた

「何ですか？」

「合気道つてどんなものなんですか？」

「ふむ、単純に言うると『争いを生まない武術』です」

「武術は暴力ですよね？」

「暴力で争いは消えるんですか？」

「暴力で争いは消えませんか？」

「矛盾してませんか？」

「してませんよ」

「でも、武術は暴力じゃないですか」

「合気道は暴力じゃありませんよ」

「は？」

「合気道は和合の武術

力で相手を屈服させるものではなく

相手の心を受け止めることで優しく、気持ちよく和解する武術です」

「合気道は話術ですか？」

「体術です」

「言ってることがわかりません」

「体験するのが一番手っ取り早いですよ

じゃあ、まずは道場に行きましよう

案内してください」

「あ、はい!!」

「それでは美鈴さん



後のことはよろしく頼みましたよ」

「はい、頑張ってください先生」

「はい、それでは」

## 【第三十四話】理想郷

弟子入りを志願してきた人達について行くと

そこには中々大きな道場があつた

「ここです」

「ほお、中々大きいですね」

「はい、以前住んでいた人が亡くなられて、長い間空き家だったので豪邸を改装して道場にしたんです」

「ふむ、では中を見させてもらいますね」

「はい、どうぞ」

そう言い、中に上がり

いろいろ見て回る

「ふむ、文句無しにいいところですね

ここなら十分にできますね」

「では、私達に稽古をつけてくれますか？」

「はい、いいですよ」

そう言うのと彼らは大いに喜んだ

「さて、ではまず最初に合気道が何たるかを説明しましょうか」

「はい、よろしくお願いします」

「そう言い、全員正座する」

彼女は弟子達の前に1人で座り、話し始めた

「合気道、それは『天地の氣に合いする道』という意味の武道です」

これは本来の意味でして、現代では『相手の氣（機）に合いする道』とも言われてま  
す

間違っていないんですが、本来の意味ではないんですよ」

彼女の話に耳を傾け、こくこくと頷く者もいれば首を捻る者もいた

「合気道は開祖『植芝盛平』さんによって創始されました」

合気道は極めて合理的な動きによって、相手を力量の差や体格の差を問題とせず倒す

武術です

合気道は相手を斃すことよりも、技の稽古を通じて心身を練成し

自然との調和、世界平和への貢献を理念としています

要するに、戦うよりも己の心身を鍛え、人々と和解し、争いを生ませない武道なので  
す

合気道は大本教の熱心な信者であった植芝盛平先生が創始したものであるが故、武力  
よりも精神面を追求したものと言えるでしょう

合気道は試合を行いません

合気道は競うものではなく、相手と心を通わせるものであり

強弱を決めるものではないのです

合気道は護身の武術であるため、試合である以上、理合上闘えないというところもあ  
ります

合気道は心身を練成する武道

理念から外れることは決してあってはいけません

そこで皆さんには合気道の原則を教えておきましょう

一つ、争いに挑むこと無かれ

二つ、憎まれること無かれ

三つ、敵と和解せよ

二つ目は一つ目か三つ目が守れば自然に出来ますよ

合気道は護身、自ら争いには挑んではいけません

合気道は相手の心を受け止めるものでもありません

心を受け止めてあげること、相手の敵意はそれと一緒に抜けます

すると相手は自分を受け入れてくれるわけですから、自然とスツキリするんです

ついでに言いますと、合気道では相手の関節を絞める技が多いですが

あれは血液循環を促し、血行をよくする上

関節を柔軟にし、ストレッチ効果もあるので健康面でも大いに役立ちますよ

皆さんどんどん稽古で技を極めてくださいね

さて、皆さんしつかり聞いてましたか？

まとめますと

合気道は心身の練磨を目的とし、敵を叩きのめすものではない

合気道は護身であり、自ら攻撃してはならない

合気道は敵と和解し、友達になること

争いの無い世界

それが合気道の理想郷です

それではお話はこれで終わりです」

話終わり、一礼すると拍手が上がった

## 【第三十五話】形稽古①

「さて、まず皆さん整理してくださいな」

《はい!!》

そう言い、全員を縦横を綺麗に整理させ

長方形の形に並べた

「まずは形稽古をしますね

基本をしつかり覚えてください」

《はい!!》

「ではまず見本を見せます

貴方、ちよつとこちらへ」

「はい!!」

1番近くの青年を手招きで呼ぶ

「まずは基本中の基本『一ヶ条』をやりますね

では突いてください」

「はい!!」

そう言うのと彼は彼女の顔に向かって右ストレートを繰り出した

それを彼女はいとも容易く捉え、肘に手を当て、床に取り押さえた

「ちやんと見ましたか？」

2と3割の人が少し難しい顔をしている

「何も難しく考えることは無いですよ

捉えて抑える

それだけです」

「いや…そんな簡単に言われても…」

「とにかく練習ですよ

さあさあ、早く」

「は、はあ…」

そう言うのと全員ペアを組んで練習を始めた

それを彼女はじつくり見ている

「ふむ…あそこの方とあっちの方は中心力がなってますね

そこの方は足運びに少し迷いがありますね

向こうの方はもうめちやくちや

これは少し詳しく教えた方がいいですかね…」

しばらくして彼女は気になった人達のところに向かった

「ちよいちよい、貴方」

「あ、何ですか？」

「貴方は足運びに迷いがありますね

ちよつと一回やってみてください」

「は、はい」

彼女が教えに行つたのは中年の男性

少し肥満気味の人だ

彼女は彼の動きをじっくり観察した

「ふむ、原因がわかりました」

「え？」

「貴方、膝を痛めてますね？」

「え!!何故それを…!？」

「貴方の動きを見てわかりました

貴方は膝の痛みを我慢するために、楽に動こうとしていますね？」

「は、はい…少し…」

「何故痛いかわかりますか？」



「え？」

「意識するから痛いんですよ

痛く無い、痛く無い、つて思えば痛くありませんよ  
心をしずめて力を抜いてください」

「こうですか？」

「はい、それで技をかけるのに集中してみてください」

「はい」

そう言い、彼は同じように形稽古をした  
すると

「お、おお!？」

さつきより技が簡単にかかります!!」

「ははは、よかったですね

体を動かしているのは心です

心をコントロール出来るようになれば怪我や痛みなどは問題無くなりますよ  
それでは同じように形稽古頑張ってくださいね」

「はい!!ありがとうございます!!」

そう言い、彼女は笑顔で離れた

彼はさつきよりも生き生きとした雰囲気で練習に没頭していた

「(さて、これで1つ終了つと

お次は、あの方にしましょうかね)」

そう言うと彼女は次の問題を片付けに行った

## 【第三十六話】 形稽古②

「ちよいちよい、そこの方いいですか？」

「ん？あ、はいどうぞ」

彼女が声をかけたのは細身でそこそこ背の高い青年だ

「技はかかっていますか？」

「いやあ、中々かかりません」

「何故だと思います？」

「力不足だと思います、僕は非力なので…」

「ははは、確かに非力そうですね」

ですが、合気道では力量は関係無い

そう言いましたよね？」

「は、はい」

「貴方が技を上手くかけられないのは力じゃありません

中心力が無いからかからないんです」

「中心力ですか？」

「はい、1回技をかけてみてください」

「は、はい」

そう言われ彼は同じように技を見せた

「はい、ストップ」

「え？」

彼女は技がかかる瞬間に彼を止めた

「はい、今貴方は中心線がグニヤグニヤふにやふにやです

これじゃあ技はかかりませんよ」

「そんなにグニヤグニヤですか…」

「ちよつと、腰を押さえさせてもらいますよ」

「え？」

彼女は彼の腰をグツと押さええた

「お!」

すると相手の人の態勢が急に崩れた

「え?ど、どうしたの!?!」

「い、いや、あんたが先生に腰を押さえられた瞬間体の力が…」

「はい、このまま技を続けてください」

「は、はい」

そう言われ、技をかけた

するとさつきよりも非常にスムーズに技がかかった

「え、ええ…!？」

「合気道で中心力はとても大切ですよ

まあ、他の武術でも中心力は大切ですが

中心線をしつかり保てば力の流れがしつかりして、相手の力を抜くことだって出来るようになりますよ

ささ、中心線を考えてやってみてください」

「は、はい」

そう言われ、彼は言われた通りにやるが中々上手く極まらない

「ん、貴方

背骨が歪んでますね」

「え」

「ちよつと服を脱いで見てください」

「は、はい」

そう言われ彼は上着を脱いだ



「は、はい…：決行キツイですね…：この…：運動…：」  
「体が歪んでる証拠ですな」

何日か続ければ中心力も臂力も付きますよ  
頑張ってください」

「は、はい!!」

「さて、あっちの方も…」

彼に教え終わるともう1人の同じ感じの人のところに行つた

その人も彼と同じで背骨が歪んでいた

彼にも同じように『臂力の養成』を教えた

【第三十七話】形稽古③

彼女はもう一人、問題がある人の所に向かった

「そこの方、ちよつといいですか？」

「え？はい、何ですか？」

彼女が声をかけたのはそこそこの歳をした男性

「おや…」

貴方、眼病なんですか？」

「……はい」

彼の目は絶えず彼方此方に動き回っていた

『眼球震盪症』

眼球が何らかの原因で意思とは無関係に動く病気だ

彼のはかなり酷いもので、上下左右に大きく動いている

「一体どうしてそのような目に？」

「子供の頃に、その…」

崖から落ちて頭を強く打って



それ以来こんな目になってしまいました…

医者にも相談したのですが、治せないって…」

「ふむ、あのめちやくちやな動きはその目の所為でしたか」

「こんな目じや武術なんて出来ませんよね…」

「ごめんなさい…」

「別に出来ますよ？」

「え？」

「貴方は元々周りのものが勝手に動いて見えましたか？」

「見えてないです」

「貴方は目の前の人々が右往左往してるのを見つめて真っ直ぐ歩けますか？」

「歩けません」

「では、その人を気にせず歩いたら真っ直ぐ歩けますか？」

「それは歩けますよ」

「ではどうすればいいと思います？」

「さあ…」

「周りのものが動いてると思わなければいいんですよ」

貴方の身の周りのものは勝手に動いてるわけではないんですから

目が勝手に動いてないと思えばいいんです

貴方は元の通り、目の動きを気にせずにいればいいんです」

「そ、そんなことで治るんですか？」

「ええ、体を動かすのは心です

心を正常に保てば、目が勝手に動いても問題ありません」

「ど、どうすればいいですか？」

「まずは心身を統一しなければいけませんね

『一教運動』をやってください

まず、左足を軽く半歩前に出してください」

「は、はい」

「拳を握って腕を真っ直ぐ下に伸ばしてくださいね」

「はい」

「そうしたら1の号令で両手を目の高さに上げるのと同時に腰を前に出してください」

「こうですか？」

「はい

そうしたら2の号令で腰を元に戻して、拳を握って両手を下に真っ直ぐ伸ばしてくだ

さい

最初の姿勢ですね」

「はい」

「そうしたら腰を右に回して後ろを向いてください」

「はい」

「そうしたら3の号令で先程言った両手を前に出す動きをしてください」

「は、はい」

「そうしたら4の号令で手を戻してください」

さっきの動きを後ろを向いてやっただけです」

「は、はい」

「これを繰り返してください」

「は、はい」

「それじゃあ行きますよ〜？」

「はい」

「1、2、3…」

「うわっ!!」

「おっと危ない」

彼は後ろを向いて腕を上げようとした瞬間バランスを崩して倒れた

それを彼女は受け止めた

「何故、倒れたかわかります?」

「え…えつと…」

「貴方の心が動きと一致してないからです

貴方は振り返った時、心はまだ振り返っておらず、置き去りにされています」

「う…確かにそうかもしれません…」

「心を落ち着かせてもう一度やってみてください

さんはい

1、2、3、4

1、2、3、4

1、2、3、4…」

彼はさつきとは違い、スムーズに出来ていた

「出来ます!! 出来ますよ先生!!」

私、こんな目なのに出来ますよ!!」

彼は涙を流して喜びながら運動を続けていた

「その調子ですよ!! 頑張ってください!!」

数分間これが続けた

すると今度は彼に『不動の体』を教えた

すると彼はあつという間にそれをものに出来た

彼は目が不自由でありながら、片足で立っけていても体がブレず

押されてもビクともしない不動の体をものにした

それで彼に一教の稽古を再びやらせると、さつきとは異なり、自在に技をかけられる

ようになった

「ありがとうございます先生!!ありがとうございます!!」

彼は土下座して彼女に泣きながら感謝した

「ははは、心さえしつかりしていれば大丈夫ですよ

これからも頑張ってください」

「はい!!」

「(さて、これで全部終わりましたね

今度は別の形稽古をさせましょうか)」

## 【第三十八話】座り技

「はいはい、それでは一旦止めてくださ〜い」

手を叩いて全員呼ぶ

「皆さん、動きは大体わかりましたか？」

《はい!!》

「では、次の練習を教えますね」

全員キリツとして彼女に注目する

「次は『座り技』をやってもらいます」

《座り技?》

全員、首を傾げて騒つく

「座り技というのは文字通り座って行う技です」

「はい」

「何ですか？」

一人の青年が手を挙げて質問する

「座って戦えるんですか？」

「戦えなきや武術じゃないですよ」

「座って戦う時なんてあるんですか？」

「あるっちゃありますね」

「どんな時ですか」

「例えば、居間で話をしている最中に突然襲われたりした時や、立てない時に役立ちますね」

「なるほど…」

「まあ、理由は別にあります」

「は？」

「座り技の稽古は足腰の鍛錬にうってつけなんですよ」

「座り技を十分に鍛錬すれば立ち技はとて簡単になります」

《《お》》

全員納得の様子だ

「さあ、早速やりましょう」

《《はい!!》》

そして全員先程と同じ様にペアになって練習を始めた  
しかし

「うわっち!!」

「いてっ!!」

「つつ〜!」

皆んな上手く動けなかったり、足を痛めたりしてほとんどの人が出来ていない

「皆さん意外と足腰が弱いんですね〜」

微笑みながら弟子達を見下ろす

「じ、じゃあお手本を見せてくださいよ!!」

弟子の一人が言い返す

「いいですよ」

では誰かやりたい方はいますか?」

しかし誰も手を挙げなかった

当然だ、彼女の強さを全員が知っているからだ

仮に勝ったとしても座っている小さな少女が相手だ

自慢にもならない

勝つても負けても得は無いだ



しかし数分後

一人の男性が出てきた

「俺がやります」

「はい、ではお手柔らかに」

力仕事をやっているのかかなり体つきが良く、力に自信がありそうな男性だ

そんな彼を前に彼女はその場に正座した

彼は立ったままだ

「どう攻めてもいいですか？」

「はい、何時でも何でも」

彼女が言い終わる直前に彼は彼女の頭めがけて右脚で蹴りを放った

しかし、既に彼の狙った先に彼女はいなかった

「!!嘘だろ!!」

彼女はいつの間にか彼の左の真横に座ってニコニコしてた

「は、早え!!」

「何だ今の!？」

全員が騒つく

「このっ!!」

彼は彼女に左脚の膝蹴りを放った

しかし

「おうっ!？」

彼の体は天井に向いていた

膝蹴りを捉えられ、彼は投げられていたのだ

彼は受け身を取れず、頭を畳に打った

「——っ!!」

頭を抱え、悶える

「ははは、揚げ足を取ってあげましたよ」

「誰が上手いこと言えと…」

「脚は2本しかありません、片脚を上げたら支えは1本になっちゃいますよ

脚をとって、持ち上げてやれば転びますよ」

「ぬう…」

彼はしょんぼりして戻っていった

「さ、お手本は見せましたよ？」

「まだ何かありますか？」

《な、無いです…》

「では、さあ、早く練習練習!!」  
手を叩いて急かした

## 【第三十九話】 膝行法

蹴りの捌きを練習させること数分後

1人の青年が彼女に話しかけて来た

「先生、正座のまま動けません」

彼は少し疲れている様で、少し息が荒かった

おそらく正座のまま動く練習をしていたのだろう

そんな彼に彼女は、まるで予想していた様に応えた

「そうですか」

じゃあ『膝行法』の練習を皆さんでしましょう」

彼女は手をパンパンと叩いて号令をかける

「はいはい!!皆さん一旦集合してくださいさ〜い!!」

弟子達は直ぐに集合し

綺麗に整列して正座をする

「今、『膝行法』が出来ないという声がありましたので教えますね」

「しつこいほう?」

「はい

膝で行く方法、と書いて膝行法です

簡単に言いますと、正座の状態です

先程私がやってみせたものの基本の形ですね」

「膝で歩くだけなら誰でも出来ると思いますが」

1人の中年の男性が発言し

それにつられて周りの人もざわつく

だが、彼女は「ふふん」と鼻で笑い、応える

「では、其処の貴方

やってみせてください」

適当に1番前にいた青年を指す

「え」

彼は少し照れ臭い様な困った様な顔をして前に出る

そして彼は自分なりに『膝行法』をやってみせた

「ほっほっほっほっ」

ドカドカと音を立て

膝で歩く

「はい、これは悪い例ですね」

「え」

彼女は無慈悲にもキツパリと駄目だしをする

「膝行法とは何のためにあると思えますか？」

「座ったまま動く為ですよね？」

「はい、そうですね」

合気道では動く際に何を保ちますか？」

「中心線です」

「そうですね」

では、座ったまま動く際は如何しますか？」

「同じく中心線を保ちながら移動します」

「正解です」

そう言っていると彼女は正座をする

「では、正しい膝行法を説明しますね」

まず、脚を軽く逆八の字の形に開いて正座をします

次に爪先を立てて正座します、踵がお尻に付いている様にしてください」

弟子達も一緒に真似する

「そうしたら腰から上の力を抜いてリラックスしてください

お尻に上体を載せている様な感じですよ

顔は真正面を向き、中心線を真っ直ぐ保ってくださいね

そうしたら、とりあえず左膝を軸に右脚を前に出してください

顔は進行方向と同じ方向に保ってください

そうしたら足の踵同士をくっつけてください

そうすることで体が安定します

次に、右膝を軸に左脚を前に出してください

そうしたら先程と同じ様に踵をくっつけてくださいね

これを繰り返して、前後左右に動きます

膝行法をする時に大切なのは『脚を開かない』『顔を固定する』『膝を浮かしすぎない』

これが大切です

勿論中心線を保つのは言うまでもありませんね」

弟子達は真似をするが

「いってえ!!」

「いって!!」

「おととと!!あぶね!!」

膝を強く付いて痛がったり

バランスを崩して倒れるものばかりだった

「難しいでしょう？」

膝行法は熟達した方でも出来る方は少ないですからね

でも、これが出来ない人と強い中心力や足腰が出来ませんからね

座り技をやる際は必須ですから

頑張つて練習してください」

そう言うと彼女は号令をかけ

膝行法の練習を始めさせた



## 【第四十話】 打撃の基本技

膝行法の稽古をすること数十分

また1人の弟子が彼女の元にやって来た

体格の良い30代程の男性だ

「先生、体捌きが打撃の練習になつていると聞いたのですが他に練習法つてあるんですか？」

彼女は袴に突つ込んでいた手を出し

腰に手を当てながら答えた

「まあ、ありますよ

そうですね、皆さん疲れているでしょうし

一休みしてから教えましょう」

そう言うと彼女は集合をかけ

休憩時間にした

弟子達は床に座つて雑談をしたり、寝つ転がっている中

彼女は1人黙々と準備に取り掛かった

10分後

「はい、皆さん集まってください」  
集合をかける

彼女の足元には木剣や木の短刀が置かれている

「先程、また質問がありましたね

打撃の直接的な練習は無いのか? というので

打撃の基本技をやりますね」

そう言うのと彼女は適当に大きな男性を選び、向き合う

「打撃の基本技はとて少ないです

大きく分けると『突き』と『手刀』の2つだけです

『正面突き』『正面打ち』『横面打ち』これだけです

ですが、やってみると意外と難しいんですよ

とりあえず見てもらった方が早いですね」

そう言い、彼女は相手を見ながら解説し始める

「まずは『正面突き』です

正面突きは胸でも腹でも良いです

『臂力の養成』と動きはほぼ同じです

中心線を保ちながら、前の膝に体重を乗せ、突く!!」

そう言い、彼に正面突きを打ち込む

「うっ!!」

一瞬の動きだった

突きが極まると彼は声を漏らし、後ろに2 m近く吹っ飛んでいた

胸に当たったのか

彼は胸を押さえながら咳き込む

「この様に、合気道の正面突きは極まると大きな力を生み出します

これは集中力による力です

空手の突きの様に、上体を捻って打ち込むものより

体重がしつかりかかり、脚の力も腕に伝わります

イメージとしては、拳にタツクルの力を込めた感じですね

飛び込む様に放つのが大切です」

そう言い、彼女は他の男性を前に出す

170cm程の筋肉質な男性だ

「次は手刀です」

ではまず『正面打ち』をやりましょう

合気道の手刀は『剣の動き』と同じです

刀で相手を叩つ斬る様に、臂力の養成の動きと同じに

振りかぶって、体重を前に乗せ

手刀を落とす!!」

彼女の手刀が彼の脳天に直撃し

ゴン!!という音が響く

彼は声も出ない程悶絶する

「これも集中力によるものです

躊躇わずに

相手を叩つ斬る気持ちで手刀を振り下ろすのが大切です

大丈夫ですか?」

彼女は悶絶する彼に手を差し出す

「だ、大丈夫です…!!」

頭を押さえながらよろよろと立ち上がる

「では、次は『横面打ち』です

要領は正面打ちと同じです

袈裟斬りをする様に、相手の顛顛に思い切り打ち込みます」  
構えに入ろうとする彼女に彼は叫んだ

「い、いや!! もういいです!!」

「遠慮なさらずに」

「無理です!! 死にます!!」

「そうですか

まあ、大体想像はつくでしょうから

機会があればまた」

彼はそそくさと戻って行った

「では、次は

木剣に応用したものを見せましょうか」

## 【第四十一話】 武器への応用

「では、武器に応用したものを教えますね」

また中から弟子を一人前に出す

がっしりとした筋肉質の中年男性だ

彼女は彼にも木剣を持たせ、相對する

「合気道の技は劍術を元に作られたものですが

合気道の技を劍術に活かすことも出来ます

まあ、技というより技術ですね

体術を極めれば武器に活かすことも出来ます

何故かと言いますと

まあ、一言で言いますと『動きが同じ』なんですよ

合気道の技は劍術の技術を改良し、体術にしたものです

まあ、体術でありながら劍術より技術が高い

そんな感じですよ

ま、それより見ていただいた方が早いでしょう

「それじゃあ、まずは面打ちの要領で打ちますね  
木剣を出してください」

「あ、はい」

そう言われ、彼は木剣を横に床と平行に出す

「それじゃあまず、木剣を剣道の打ち方で打ちますよ

思い切り打ちますからね

踏ん張ってくださいね」

「は、はい!!」

言い終わった直後

彼女の木剣が彼の持つ木剣に勢いよく振り下ろされる

ガン!!と大きな音が鳴り響く

同時に彼は衝撃で、少し前によろける

「これが一般的に知られている面打ちです

誰か剣道をやっていますか?」

ちらほらと手が挙がる

「剣道をやったことがある人はわかるでしょう

でも、これは間違ったやり方です

合気道での面打ちはこんなやり方じゃありません

『振り切らないといけない』のです

剣道の様にブンブンと止めちや駄目です

相手を両断するつもりで振り切らないといけないのです

まあ、見てもらいましょう

構えてください」

「はい」

先ほどと同じ様に構える

「じゃあ、行きますよ?」

「はい」

次の瞬間

さつきより剣速は若干遅いが、その後が違った

彼は目一杯踏ん張ったが

彼女の木剣が当たった瞬間、彼の木剣が叩き落とされたのだ

凄まじい衝撃で彼は前につんのめる

「痛っ!!」

ビリビリと彼の手が痺れる



弟子達全員がポカンとした顔で彼女の顔を見る

彼女は力んだ様子も無く、ニコニコと微笑んでいる

「びつくりしましたか？」

まあ、無理も無いでしょう

ほとんどの人は本物の打ち方を知らないですからね

まあ、要領はさっきの手刀と同じです

前に重心を乗せ、相手を叩つ斬る心構えで振り下ろす

それだけです

一般的な剣道の素振りは間違つたやり方をしてます

あれじゃあ、何万と振つてもその回数分間違つた癖がついているだけです

剣、刀は相手を切る為のものです

相手を叩くものじゃありません

袈裟斬りや突きのない剣道は剣術にあらず

バシバシと打ち合うのは剣術じゃありません

スパツと切るつもりで振らないと剣は力を発揮しません

強く振り切る為には合気道の様な動きが必要です

剣に集中力を込め、切る

合気道での剣術はこうです

武器は単なる持ち物です

持っているのは体術の時に使っている手です

手と繋がっているなら体術の技術は活かせます

違いはリーチだけです

剣や杖に限らず、何にでも合気道の技術は応用出来ます

是非皆さんも色々なものを使って試してみてください」

ペこりと一礼し

弟子達も礼をする

「おっと、短刀を忘れてました

せつかくですしこれも使ってみせますか？」

「遠慮しておきます…」

「そうですか」

少し引きつった顔で断る彼に

彼女は笑顔で応えた

## 【第四十二話】 武道の見方

稽古をししばらく続けていると、いつの間にか日が暮れて来ていた  
障子を明け

半分以上沈んでいる夕日を見て眩く

「おや、もうこんな暗くなって来ましたか」

彼女は集合をかけ、弟子達を集める

「皆さんお疲れ様でした

コロコロと稽古が変わってしまいました。よくついてくれましたね  
大分暗くなってきましたので今日はこの辺で終わりにしますね」

彼女は一呼吸置き、話を続ける

「終わりにする前に、少しお話をしましょうか」

弟子達を座らせ、彼女も正座する

「これは私が元の場所にいた時にあったことですね

私が講演をしていた時、何人かの方が私にこう聞いて来たんですよ

『試合をやらす、形稽古だけやって実戦で戦えるのか?』って

皆さんもそう思っている人は何人かいるでしょう

まあ、大抵の人はそう思いますよ

でも、そう言う人は『形稽古を何故やるのか』が理解出来てないのですよ  
勿論、基本の動きを覚える為ですがもっと深い所を知らないのです

『形稽古をすること、基本の動きを覚え、且つ理合を知ること』です

大抵の方は形にばかりとらわれてます

だから皆、動きがどうの言う訳です

動きがどうこうはどうでもいいのです

大切なのは形ではなく、何故効くかを知ることです

形稽古を通じてそれを知るので

合気道に試合が無いのは『試合をしたところで修行にならない』というのもあります

合気道は基本をとことん鍛錬することで成長します

実践したって合気道は磨かれないのです

基本、基礎、根本を理解することが合気道の修行なのです

体を鍛えたり、実践したりするのは合気道に『必要無い』ものなのです

基本さえしつかりやり、理解するだけでいいのです

地球と同じです

大地があるから様々なものが生まれます

大地が滅茶苦茶なのに地上を弄ったって地球は榮えないでしょう？

基礎を固めることで応用が効くのです

皆さんは表面ばかり見て、奥底のものを見ていないのです

武道をやる側の人も同じです

ただ、技ばかり練習しても成長しません

『何故やるのか、何の意味があるのか』を理解しないと駄目です

合気道の開祖の方は『基本技を教えたら後は個人の自由』という風に教えていたそうです

無責任に感じますが、これが武道の正しい教え方なのです

教わるのではありません

自分で発見していくのが武道の修行なのです

皆さんも、いちいち私に聞くのではなく

自分で見つけ出す、理解するようにしてくださいね

武道は工場じゃないんです

同じ人を量産するのではなく、個人個人を成長させるものなのです

武道をやる理由は自由ですが

武道をスポーツジムと勘違いするのはよしてくださいね」

言い終わると彼女は弟子に号令をかけさせ

全員で一礼する

《ありがとうございました!!》

「はい、皆さんお気を付けて帰ってくださいね」

彼女は玄関まで全員を笑顔で見送った

## 【第四十三話】成長

数日後

彼女が幻想郷にやってきてから約3週間が過ぎた

彼女は毎日、決まった時間に稽古を教え

弟子達も順調に成長していた

驚くことに

彼女の弟子は誰一人として遅れたものはいなかった

ある日の夕方

彼女のいる道場に一人の人が訪ねて来た

静かに襖を開ける

「失礼します」

長い赤髪に、緑の帽子が目立つ少女

紅 美鈴だ

「……。」

彼女を見て、彼女はくすつと微笑み

彼女を迎えた

「随分、成長しましたね〜」

「…はい」

彼女と握手をし

少し照れ臭そうに笑う

「まあ、どうぞどこちらに」

美鈴を道場の奥に連れて行く

連れていかれたのは彼女の部屋だった

「さ、どうぞ座ってください」

ちやぶ台と、それを囲むように置かれた座布団がある

実に和風というか、彼女らしい素朴な部屋だ

「失礼します」

2人とも座布団に座り、対面する



「…」

「…」

数分ほど2人は無言で見つめ合った

「ふう…」

貴女は本当に面白い人ですね〜」

「な、なんですか」

苦笑いを浮かべる彼女に対し

ちやぶ台に頬杖をつき、ニヤニヤと笑みを浮かべる

「つい、この前までは

コロつと投げられた人なのに、今じゃ中々投げられそうにないですからね」

「…」

彼女の言葉に驚きつつも喜びの表情を浮かべる

「貴女の成長の早さには驚きですよ…」

「?どうしましたか?」

少し、声のトーンが低くなった彼女に問いかける

「…いえ

ちよつと、短かつたなうと思ひまして…」

「私の成長のことですか？」

彼女に聞くが、彼女は何も答えなかつた

ただ、彼女はこう言つた

「武道家にもなると…見たくもないものが見えてしまうものです」

彼女はこの言葉が理解出来なかつたが

喜ぶものではないことが直感的にわかつた

「先生…」

あの、よかつたら明日…

幻想郷を廻つてみませんか？」

励ますかの様に彼女は聞いた

「…いいですね

行きましようか、いい思ひ出を作りに行きましよう」

彼女は微笑みながら彼女に応えた

「さて、明日出発ですか

よければ泊まつていきますか？」

立ち上がりながら彼女に聞く

「あ、はい

許可はもらいましたので」

「そうですか

じゃあ、夕食はどうします？

大したもののは作れませんが」

「あ、何でも大丈夫です

手伝いましょうか？」

「おや、料理出来るんですか？」

「まあ、それなりにですが」

「そうですか、それはありがたいです

どうも料理は難しくですね」

「ははは」

2人一緒に台所に向かう

調理中

「先生、好きな人っていますか？」

「いません」

「あ、はい」

（即答って…）

「貴女はどうなんですか？」

「え？あ、それは…その…」

「本当、面白い人ですね」

「すみません…」

## 【第四十四話】 觀光（前編）

翌朝

2人は食事を済ませ

出かける準備を済ませた

「さて、それでは行きますか」

「はい」

2人は玄関を出て

瀬賀は門の横に「本日休み」と書いた張り紙を貼った

「何処に行きますか？」

「貴女にお任せしますよ」

「はい」

彼女は予想していたかのように、少し呆れた様な顔で応え  
その場に屈んだ

「…ふふっ」

「可笑しいですか？」

「いいえ、ありがとうございます」

彼女は溜息の様な笑いをし

彼女に掴まる

「それじゃあ、行きますよ」

「はい」

美鈴は彼女を背負い

猛スピードで走った

く妖怪の山く

「何となく、此処に来ましたけど…」

良いですか？

「ええ、結構ですよ」

お疲れ様です」

到着し、彼女を背中から降ろす

特に当てもなく、ただ山中を歩き回る

「さっきのは見事でしたよ」

「え？」

歩きながら彼女が突然話し出す

「私がどうして欲しかったか察知出来たことですよ」

「あ、ああ…そのことですか…」

いや、その…何故か自然と…」

戸惑いながらも照れる

「ふふくん？」

「か、からかわないでください…」

数十分程歩いていると、一つの建物を見つけた

建物の玄関付近には1人の少女が立っていた

「おや、懐かしい人が」

そう呟くと、その少女は彼女に気付いた

「ん？あっ!!」

「お久しぶりですね、文さん」

「お、おはようございます…」

彼女は少し控えめに挨拶をした

「まあまあ、そんなに警戒しないでくださいな

気楽にしてください」

「はい…」

彼女はそう言われ

深呼吸をした

「随分と大人しくなりましたね

何時もはもつと賑やかだったのに」

美鈴がそう呟くと彼女は人差し指で頬を搔きながら応えた

「いや…鬼に勝った人なのでちよつと近寄り難いというか

怖いというか…」

「なるほど」

彼女は納得した様に応えた

「ところで、何故こんなところに？」

「まあ、観光ですよ

美鈴さんには運んでもらってます

貴女は何をしてたんですか？」



「ええ、まあ…」

ちよつと新聞のネタに困つてまして…」

「そうですね、大変ですな」

「まあ、よくあることなので平気ですよ」

彼女は腰に手を当て、溜息混じりに言う

「さて、そろそろ他の所にも行きますか」

「はい」

「それでは文さん、またいつか」

「あ、はい」

彼女は美鈴の背中に掴まり

彼女に別れを告げた

く地霊殿く

「よつと」

「お疲れ様です」

彼女の背中から降り、少し息が上がっている彼女の腰をポンと叩く

「久しぶりに来ましたね、こころ」

「そうですか」

2人は薄暗い中、スタスタと歩く

しばらく歩いていると1人の女性に会った

「あ」

「おやおや」

長い金髪に、大きな一本の角が生えた女性

星熊 勇儀だ

「お久しぶりです、御元気でしたか？」

「ああ、この通り元気だよ

あんたのおかげで、私への印象はちよつと変わってしまったけどな」

「ははは、それはどうもすみません」

腰に手を当て、少し眉をひそめたが

彼女は笑顔で応えた

「でも、あんたを憎んじやいないよ

あんたの強さは大したもの、私には届かない強さだよ」

「そんなことありませんよ

貴女も頑張れば私の様になれますよ」

「ははは、そうかい」

そりやあよかつた、いつかはあんたに勝ちたいからねえ」

「2人とも仲良いんですね」

美鈴が呟く

「さて、私達は観光中ですので

それでは」

「ああ、またいつかな」

2人は別れを告げ、再び歩き出した

## 【第四十五話】観光（後編）

しばらく歩くと見覚えのある館が見えてきた

「ここも久しぶりですね」

地霊殿だ

彼女は懐かしそうに中に入っていた

中に入ると広い広間にある階段の上に1人の少女がいた

「あら、貴女はあの時の…」

「お久しぶりです」

この館の主人である古明地 さとりである

彼女は階段から降りてきて

彼女の目の前まで歩いて来た

「何か用？」

「ええ、まあ挨拶でもと」

「そう

でも、いきなり何故？」

問いかけるが

彼女は何も言わなかった

「まあ、いいわ

せつかくだから、お茶でもどおかしら？」

「いえ、結構です

そこまで長くいるわけではありませんので」

「そお…

とところでそっちの人は？」

美鈴の方を見て言う

「まあ、一緒に回ってもらってる美鈴さんです」

「ああ…なんとなく察したわ」

彼女は2人の顔を見比べて言う

「さて、それではそろそろ行きますか」

「はい」

「もつとゆつくりしていても良かったのに」

「残念ですが、少し忙しいものでして」

「そお…」

「そういうことですので、でわ

其方の妹さんにもよろしくお願いしますね」

彼女の隣を指して言う

「わっ!!こいしいつの間に…」

「ばいばい」

驚く彼女をよそに手を振る

彼女はクスクスと笑いながら館を出た

「この世界は変わった方が多くて面白いですね」

道中、彼女がそう呟く

「そうですか

でも、観光ですから、もう少しゆっくりしてもいいんじゃないですか？

忙しいって、まだ正午前ですよ？」

「そのうちわかりますよ」

彼女は澄ました顔で応えた

そんな彼女に美鈴は唇を噛みながらついて行った

「次は何処に行きます?」

穴から外に出て

美鈴は彼女を背負い、聞く

「そうですねえ

では、あそこの神社に連れて行ってください」

遠くに見える鳥居を指差す

「はい、では捕まっけていってくださいね」

そう言うのと彼女は目的地まで猛スピードで走っていった

1時間程走り、到着した

「お疲れ様です」

息が上がリ、前屈みになっている彼女の肩を叩いて言う

「ふむ、まあまあ立派な鳥居ですが

手入れを少し怠ってますね」

階段上にある所々に苔やカビが生えた鳥居を眺める

一呼吸置き

2人は長い石階段を登っていった

「ふむ、神社自体も少し手入れを怠ってますね」

少し古臭い雰囲気匂を匂わせる神社を見て

彼女はやや呆れた様な態度をとる

「これじゃあ神様も困ってしまいそうですね」

山にある少し古い様な雰囲気を出す神社

博麗神社である

2人は神社の賽銭箱の前まで歩くと

神社の中から1人の少女が顔を出し

こう言った

「神様よりも先ずは御賽銭よ」

赤白の巫女服を身に纏った少女は襖を開け

2人の前に立った



## 【第四十六話】愛

神社の中から出てきた少女

紅白の巫女服に大きなリボンを身につけた少女

この神社の巫女「博麗 霊夢」である

靴を履き、2人の前に歩み寄る

「貴女ね？最近噂になつてゐる外来人って」

「噂か如何かは知りませんが、外からやって来た者です」

彼女は軽く頭を下げ、挨拶をする

「で、何しに来たのよ？」

「そうですね、そこにいる方に用が…」

というより、そこの方が私に何かあるようですので」

彼女は鳥居の隣を指差して言う

すると

空間に切れ目が入り、その中から1人の少女が現れた

「あら、気付いていたのね」

「ええ、ずっと」

現れたのは、傘を持った金髪の少女

この幻想郷の管理人「八雲 紫」である

「私がこの世界にやって来た時…」

いえ、私が来る前から貴女は私を観ていましたね？」

「あらあら、全部気付いていたのね」

片手を頬に当て、参った様な顔をする

「ええ、貴女の言う通り」

私は貴女をずっと観ていたわ、貴女が現世にいた時から今までずっと」

「何故、私を監視していたのです？」

彼女が聞くと

彼女は扇子を取り出して開き、口元を隠して言った

「貴女がこの幻想郷を変えてくれるか観ていたのよ」

それを聞くと彼女はため息を吐いて言った

「私が世界を変える…ですか

そうですか…わたしは何か出来ましたかね？」

彼女に眉を顰めて聞く

「ええ……貴女は凄いわ

ここ半年足らずで貴女は里の殆どの人を更生させたわ

以前より里は活気盛んになり、事故も減り

何よりも、人々の絆がとて深まったわ」

それを聞くと彼女はニコツと笑い、応えた

「そうですか、私は力になりましたか

里の方達は私の教えを守ってくれているんですね」

「貴女は本物の武道の精神をこの幻想郷に広めてくれたわ

人は口で幾ら平和を公言しても平和にはならない

でも、武道は触れ合い、お互いの心を通じあわせる

特に貴女の言う、合気道というのはその力がとても強い

自分を主張せず、相手に臨機応変に心を合わせ

相手を傷付けずに、むしろ相手の体の為になる技を使い、身を守る

自分も相手も傷付かず

お互いに身を守る術を身につけ

更にはお互いの絆を深める

これ程までに平和を愛し、尚且つ平和にさせたものは見たことがないわ

「こんな素晴らしいものを伝えてくれた貴女には感謝するわ」  
「お褒めいただきありがとうございます」

合気道とは、平和を愛する武道です

合気道は一言で表しますと『愛』なのです

相手の氣に合いまする道

天地の氣に合いまする道

世界の平和を愛する道

合気道とは『愛氣道』なのです

この世の全てに合います、愛してこそ合気道なのです

是非とも、この合気道をこの世界で広めてください」

「ええ、勿論よ」

2人は握手をし

一息ついて、彼女は言った

「この世界での私の役目は終わりました」

## 【最終話】 合氣道よ永遠に

「え？ 役目は果たしたって…

どういふことですか？」

美鈴が慌てた表情で聞く

「私がここですべき事は終えたということですよ

もう、私がここにいる必要はありません」

「…そんな」

彼女は肩を落とし、俯く

そんな彼女に背を向け、数歩歩いたところで振り返る

「おっと、まだ有りましたね

私がここで最後にやるべきことが」

「え？」

「貴女の試験ですよ」

彼女はニカツと笑い

下駄を脱ぎ、袴から手を出す

「さあ、最初で最後の試験ですよ」

そう言うと、彼女は口を真一文字に結び

真剣な表情で言う

「好きにかかって来なさい」

「!!」

見たこともない彼女の威圧感に彼女は動揺しつつも

肩の力を抜き、戦闘の姿勢に入った

「本当に手加減無しで行きますよ?」

「構わん」

「では…!!」

彼女の了承の直後

彼女は一気に間合いを詰めた

肘まで届く範囲にまで一気に近付いたが

彼女は直立不動だった

「ふん!!」

彼女は渾身の力を込め

彼女の胸を狙って水平に手刀を打ち込んだ

しかし

「ほれ」

当たると思った瞬間

彼女の視界は上下逆転していた

投げられたのだ

手刀を捕られ

四方投げの形に投げられたのだ

「……っく!!」

しかし彼女は投げられることを想定の上でかかった為

投げられた瞬間、空いている左手で地面を突き飛ばし

受け身を取った

間髪入れず、彼女は次の攻撃に移った

左腕の突きだ

しかし

今度は当たると瞬間に彼女の体が背後に弾き飛んだ

『跳ね返し』である

拳を捕られ、伸びきった瞬間に一気に押された為

壁に衝突したのと同じ様な衝撃を食らった

彼女は何か受け身を取ったものの

肘を痛めた

（くそ…やつぱり普通に攻撃しても全部捌かれる…

どんなに速くかかっても、どんなに重い技を使ってもきつと捌かれる…）

冷や汗をかきながら間合いを図る

（駄目二元であれを使うしかないかな…

自信は無いけど…いや…

私は出来る!!誰にも負けない!!）

「…。」

（ほお、心を積極的に使うことで氣を出そうとしていますか

ですが、氣で挑めば氣が多い方が勝ちます

まだ未熟な貴女無理があるでしょう）

「すく…はく…」

彼女はその場で止まり

ゆっくり、静かに深呼吸をし始めた

「…。」



（藤平式呼吸法を？）

まさか…独学で見つけたんですか…）

数分ほどすると今度は

軽く爪先立ちになり、手を素早くぶらぶらと降り始めた

「…。」

（指先ぶらぶら体操…）

誰でも楽に体の力を抜くことが出来るリラックス体操…

これまで覚えたんですか…）

また数分ほどすると

彼女は目を瞑り、臍下丹田に指先を当て

ゆっくりと呼吸を始めた

すると

見る見るうちに彼女の気配に落ち着きが現れ

肌の血色がより良くなって来た

「心身統一…いや

貴女のそれは天地の氣に合いした心身統一ではありませんね？」

彼女が聞くと

彼女は目を開け、答えた

「私はまだまだ心身統一をものにしていません

ですが、私の『気を使う能力』を応用することで再現しました」

「!!」

そうですか…ふふっ

貴女に感じていた不思議な才能はそれだったんですね

面白い!!さあ、かかって来なさい!!」

「わかりました」

そう言うと彼女はゆったりと歩み寄る

お互い、間合いに入った

数分の沈黙後

「!!」

(いける!!)

美鈴が突き出そうとしたその瞬間

「待った!!」

彼女が手で止めた

「え!？」

「貴女はその攻撃は当たります

いや、大したものですよ

氣力で負けてしまいました、いや、結構ですよ」

ポカンと呆気にとられる彼女の肩を叩き、試験を終わらせた

「えっと、あの

これって…」

「美鈴さん、いえ…」

紅 美鈴さん、貴女に合気道八段位を与えます」

「え?…えええ!？」

より一層戸惑った顔で叫ぶ

「貴女は私に当てられる攻撃を出せる様になりました

これほど上達した方は貴女が初めてですよ

これを機に、さらに修練に励んでください」

「は…はは…」

あ、ありがとうございます…

何だかな…」

頭を掻き、苦笑する

「さて、これで本当に私の役目は終わりました

私を元の場所に帰らせてください」

「わかったわ」

紫にそう言い

彼女はスキマを出した

「思い残すことは無いのかしら？」

「ええ、役目を果たした今

私がここにいる必要はありません」

「先生…行ってしまうんですね…」

悲しそうな表情で言う

そんな彼女に彼女は笑顔で応えた

「美鈴さん、貴女はとても強くなりました

そんな悲しい顔をしないでください、心と身体は一如です

心を明るく持つてください、心を強く持ち、氣持ちよく笑ってください

そして、美鈴さん

貴女は此処で合氣道を教えてください

争わざるの精神を、和合の心を皆んなに教えてください

正しい心を、正しい武道を教える

貴女はその資格を持ちました

日々、皆人と共に修練に励んでください」

「先生…わかりました

先生から学んだこと、大切にします!!

どうかお元気でいてください!!」

お互いに笑顔で握手をした

「では、美鈴さん

ありがとうございました」

「ありがとうございます」

お互い礼をし、彼女はスキマの中へ消えて行った

「…おや？」

気がつくくと彼女は自分の寢室にいた

「戻って来たみたいですね…」

起き上がり、布団を片付ける

「大分空けてしまいましたね…」

皆さんに心配かけてしまいましたかね？」

玄関を出て

門を開ける

すると

《おはようございます!!先生!!》

数十人の弟子達がちようど来ていた

「はい、おはようございます」

長い間空けてしまい、すみませんね」

「え？」

「？」

「何言ってるんですか先生」

「昨日会ったじゃないですか」

「今日は何時ですか？」

「5月10日ですよ、何を寝惚けてるんですか？」

「ああ、そうでしたね

「どうもありがとうございます」

（こつちの時間は進んでない訳ですか）

頬をポリポリと搔き、誤魔化す

「まあ、それはそれとして

さ、稽古をやりましょう」

《はい!!》

全員で玄関に向かう

が、途中で

「あれ？先生

その下駄どうしたんです？

随分と年期が入ったもののが様ですが」

「ん？ああ……これですか」

少し間を開け

彼女は朝の快晴の空を見上げて答えた

「私の貴重な記念品ですよ」



# 【おまけ】合気道とは

書：瀬賀 剛二三

皆様、初めてという方は初めまして

知っているとの方はこんにちは、瀬賀 剛二三と申します

これは、合気道について「よくわからない」という方や「インチキだ」などと言う方の為に、出来るだけわかりやすく説明したり、質問に回答したものを纏めたものです

もし、これを読んで合気道に少しでも興味を持ったたり、誤解が解けてくれたらとても嬉しいです

Q. 合気道ってなんですか？

A. 合気道とは、大正末期から昭和前期にかけ、植芝盛平氏によって創始された、日本発祥の武道です

合気道は元々、「合気柔術」という武術でした

その合気柔術に植芝氏が「大本教」で得た思想を取り入れたものです

ですので、合気道とは合気柔術に和合の理念を取り入れたものなのです

Q. 合気道と柔道は何が違うんですか？

A. 一番の違いは力の使い方です

柔道は主に「引く力」を使うのに対し、合気道は主に「前に押す力」を使います  
ですので、一見同じ様な技でも、根本的に異なるものなのです

後は、やはり理念でしょう

柔道は基本的に戦う為の武道ですが

合気道は極力戦いを避け、戦っても相手を痛めつけない武道です

Q. 柔道から合気道に移りたいのですが、何か柔道の技術は使えますか？

A. 使えません

柔道と合気道では、力の使い方が正反対です

合気道では、柔道の経験は殆ど活かせません

実際、柔道などから合気道に移った方の殆どは、柔道の経験を活かせず、つまずく人が多いです

Q. 合気道を学ぶ際に必要な知識はありますか？

A. 特にありません

合気道を学ぶ際は、出来るだけ何も知らない方が良いです

他の武道武術の知識や、スポーツの知識など

そういうものは綺麗さっぱり忘れ

白紙の状態で「素直」に学びに行く方が良いです

他の知識があると、あれこれ疑ったり、変にアレンジしたりして

合気道の姿勢を失う事があります

合気道を学ぶ際は、他の武道などの知識は捨て

白紙の状態で受ける方が覚えやすいです

Q. 合気道の技は幾つありますか？

A. 基本技は50前後程度です

ですが、基本技はあくまで基本技です

これがそのまま戦いに役立つわけではありません

実戦では、基本技を応用して戦います

Q. 基本技って何ですか？

A. 基本技は基本の動き、基本的な力の使い方覚える為にやるものです。基本技を鍛錬することで、しっかりした力の使い方や、中心力や集中力などを鍛えます。

基本技は実戦の「基礎」です

大抵の人は基本技を「模擬戦」か何かの様に見ているようで、「実戦でこんな攻撃は来ない」などと言います

基本技の稽古は実戦のシミュレーションではありません  
ここをしつかり知ってほしいです

Q. 合気道の受けは自分から跳んでますよね？

A. はい、そうです

ですが、正確には「跳ばざるを得ない」のです

あれは「受け身」というもので、怪我やダメージを防ぐ為にやるものです  
ですが、受けが自分から跳んでいるからといって「インチキ」というわけではありません  
せん

特に、演武を観てインチキと言う方が多いですが

あれは仕方ないことなのです

演武で受け身を取らなかつたらどうなるか？

受けの方は腕や肩を破壊されて演武どころではなくなります

合気道における演武とは、単に魅せる為のものではありません

やっている人達にとっては稽古なのです

自ら跳ぶのは、自分にどの様に力がかかっているか、どう崩されているのかを感じ取る為に行っているのです

受け身を取らなかつたら、それらを研究する前に体がおしやかになってしまう  
受け身を取るのには、仕手にとっても大切です

受け身を取ってくれることで、よりスムーズに稽古が進みます

受け身を取ってくれることで、正しい崩し方などが見つけやすくなるのです

受け身を取るのにはインチキではありません

あれは怪我の防止と、彼等の練習の為にあるのです

実際、演武などで受け身を取らなかつた人で、肩や腕の骨が砕けた人がいます

演武の受け身を観て「インチキ」と言うのは幾ら何でも早計ではないでしょうか？

どうしても疑うのであれば、受けをやってみるのが一番手取り早いのですが

そももいかないのです

Q. 関節などを極めてますが、痛いですよね？

A. そんなことはありません

正しくやれば痛くないのです

では、何故痛くないのに相手は崩れるのか？となりますが

あれは、相手が「踏ん張りたくても踏ん張れない」様に力を流しているからなのです  
人間とは不思議なものでして、力を入れてみると、何処かに必ず弱いところが出る  
のです

そこに力を加えると、相手は力が抜けてしまつて、踏ん張れなくなるのです

合気道の技の殆どはこれを利用しています

その為、痛くなくても相手は簡単に崩れてしまうのです

ぎゅうぎゅう締め付けて痛がらせて喜んでいる様では、永久に合気道の高みには達せ  
ません

これが出来ないと、崩せる相手には限界があります

素人相手ならちよいと手首を捻るだけで降参させられるでしょうが

何かしらの修行を積んだ方には効かないでしょう

そうならない為に、相手の力を抜くことが出来る様にならないといけないのです

力を抜ける様になれば、どんなに我慢強い人でも、どんなに大きい人でも、皆同じ様に簡単に崩せます

これは合気道を極める上でとても大切なので頑張つて研究してください

Q. 相手の力はどうやって抜くんですか？

A. これは「見つけろ」としか言いようがありません

何せ、これは人によつて違いますし、状況によつても変わります

何度も練習して、一瞬一瞬を捉えられる様になり、戦いの中で見つけるしかありません

練習あるのみです

弱いところを見つけ、力をちよいと入れるだけでいいです

そうすれば相手はカクーンと力が抜けて崩れます

Q. 中心力って何ですか？

A. 簡単に言うと、中心線を真っ直ぐに保つ力、もといそこから生まれる力のことで  
す

これは合気道に限らず、本来はほぼ全ての武道武術格闘術にあるべきものです

格闘技などの経験がある方はわかるんじゃないでしょうか？

姿勢をピシツとした方が技が効きやすかったり、少ない力で相手を倒せたりなどあると思います

Q. 集中力って何ですか？

A. 簡単に言うと、体全体の力を一点に集中させること、集中させることで生まれる力のことです

合気道は力を使わないと言いますが、そんなことはありません

と言っても、一般的に思われている力のことではありません

一般的に言う力というのは、筋肉を力ませることで生まれる力のこと

ここで言う力というのは、体全体の筋肉、と言うよりは体全体を動かすことによつて生まれる力のことです

まあ、簡単に言いますと

全身の力と重心移動によつて生まれる力です

Q. 固定力って何ですか？

A. これは文字通り体を固定する力のことです



と言つても、力んで体をガチガチに固めればいいつてわけではありません  
力を抜いて、中心線は保つたまま体を固定するのです

この固定力が無いと集中力は活かせません

例えば、臂力の養成の稽古を観ればわかると思いますが  
あれにも固定力が使われています

特に腰がそうですね

背中を真っ直ぐ保つたまま、体を前に押し出しますね

もし、この時に固定力が無かったら背中はふにやふにやに曲がつてしまい、力は発揮  
されません

例えば、硬い鉄の棒で物を押すのと、柔らかいゴムホースで押すのなら何方が力が伝  
わるでしょう？

わかりますね？これと同じことなのです

固定力は腰に限らず、肘にも肩にも何処にでも使われます  
固定と言つても関節を固定するわけではありません

その場に固定するのも固定力です

例えば、裏拳などは空間に固定して打つものですね

Q. 呼吸力って何ですか？

A. これは中心力と集中力に加え、タイミングを加えることで生まれる力のことで、何故、呼吸力と言うのかと言いますと

これは呼吸のリズム、もとい息を合わせるなどするからです  
呼吸を使うから呼吸力というだけです

呼吸のリズムと言いましたが、これはただ単に一定のリズムで呼吸をすればいいわけではありません

その場に依じて緩急をつける必要があります

例えば、相手の攻撃を誘う時には吸い、素早く動く時は止め、力を加えたり抜いたりする時は吐くなど

これを自然に出来る様になると、激戦の中でも疲れることがなくなります  
散歩でもするかの様に楽に動けるからです

これは合気道を極める上で、凄く大切なので必ず覚えてください

Q. タイミングの力って何ですか？

A. 特定のタイミングに合わせることで生まれる力のことです  
ですが、これを知ってる人はとても少ないです

よく、合気道の演武などを観ていて「攻撃をあんな簡単に捌けるわけない」などと言う方がいますが

そういう方達はタイミングが生み出す効果を知らないのです

例えば、合気道では手刀を手刀で弾いて相手を吹っ飛ばすなんていうのがありますがあれはタイミングの力を使ったものです

相手が力を100%出してから打つては駄目、かといって出す前にやっても相手は感づいて止めてしまいます

力が100%出る寸前で打つのです

この時に打つと、相手は力を入れる方向を突然変えられてしまいますから

例えば、正面に打ちたいのに、横に力の向きを変えられたら、意思とは違う方向に打ち込もうとした力が行きますから、横に吹っ飛んでしまうのです

さらに、此方が勢いよくやると相乗効果でとてつもない力が生まれます

要するに、銃を撃とうとしたら銃口を撃つ寸前に曲げられたのと同じです

相手のスタート直前に打ち込むわけですから、此方は全然力はいりませんし、力がぶつかり合うわけはありませんから此方の手が痛くなることはありません

ですが、相手は自分の力が跳ね返って来たわけですから、相手の手はダメージを受けます

人によっては手が真つ赤に腫れ上がった方もいます

タイミンクの力は日常生活でも体験することがあるでしょう

例えば、野球でジャストミートした時に殆ど反動は無いのにボールは遠くに飛んでいくのが良い例です

Q. 誘いつて何ですか？

A. 簡単に言いますと、相手の攻撃を誘う挑発みたいなものです

此方が攻撃を寸止めしたりして相手の防御を崩すのはフェイントですが

誘いは、此方が防御を甘く見せたり、相手が動かざるを得ない様なことをして隙を出させることです

例えば、此方が顎を突き出してやったりしたら相手はそこを狙いたくなりますし

手をひらひらしてやったりすると、そっちに意識が集中したりします

手に意識が集中している時にスツと手を動かしたりなんかすると、相手はそれについていたりします

相手の股下で足を踏み鳴らしたりすると相手が反射的に避けようとするのも、誘いの要素が入ってますね

誘いは、相手が攻撃を仕掛けてこない時などに使います

でも、出来ることならなるべく使わない方が良いでしょうね

Q. 合気道って多人数相手に勝てますか？

A. 勝てるか勝てないかと言ったら勝てます

と言うよりは勝てないといけないものなんですけどね

武道武術と言うのは元々、戦場で使われていたものです

戦場では1対1なんて戦いは普通ありませんから、単体に集中するよりも、縦横無尽に動いて相手を翻弄する技術の方が大切だったのです

だから、武道は多人数相手に戦うのが当たり前なのです

1人にしか勝てない様なのは武道武術として、価値が低いでしょう

さて、ではどうやって合気道は多人数相手に戦うのか？となりますが、簡単に説明しましょう

これには鉄則があります

1つ、集団の中で一番強い奴を最初に倒す

2つ、相手の闘志を掻き立てて自分を襲わせる

以上です

集団というのは通常、最も強い人を中心に活動するものです

強い人はまあ、用心棒みたいな立ち位置です

周りの人は、そういう人に依頼心を抱いているもので、心の拠り所なのです

そんな人が倒されてしまうと、周りの人は心の拠り所を失い、一気に統率が崩れます

こうなると周りの人は戦術もクソもなく、闇雲に攻撃するしかありません

こうなったら合気道の格好の獲物です

相手は冷静さを失って、怒りに任せて攻撃して来ます

相手は此方をブツ飛ばす一心ですので、動きが大きく、隙が大きいですし、予測しや

すい

相手からしてみれば、必死なのでしょうけど

此方からしてみれば、普段の演武の動きと変わらないものなのです

技術の無い相手ほど倒しやすい相手はいません

集団というのは戦術を失うととても弱いものです

囲まれている時なんかは、攻撃をパツと躲すだけで、相手は味方同士ぶつかり合った

りしてしまふんですからね

ひらひらと避けているだけでも、自滅を凶れてしまうのです

集団戦は武道の独壇場と言っても良いでしょう

何せ、専門なのですから

Q. 氣って何ですか？

A. 簡単に言いますと、自然の力です

心身統一することで生まれる不思議な力のこと  
です  
まあ、心のベクトルですかね

Q. 氣は何が出来るんですか？

A. 一言で言いますと、本来の力が出せます

と言つても、火事場の馬鹿力とは異なります

あれは体のリミッターが外れているのであつて、こつちは違います  
生物の本体というのは心です、体はその影

つまり、心と体というのは、鏡に映った姿と同じです  
本体が動けば鏡の中の自分も動く、これと同じです

心が動けば体が動く、心が不動なら体も不動なのです  
心に任せた状態が本来の姿と言つて良いでしょう

Q. 氣を出すとどれくらい強くなりますか？

A. とても強くなるという他ありません

具体的には少なくとも「今の10倍以上の力が出せる」ってところです

氣を出せればとても強くなります

私の様な小さい人でも熟達すれば、小指一本で7人の大男を押し返すことも出来ますし、どんなに力の強い人でも腕を曲げられませんかし、持ち上げられませんか

心の自分が不動なら、体は決して動かないのです

心の自分が強ければ、現実でも強いのです

氣を出して挑戦すれば、何事もとても良い結果が出ます

仕事は捗りますし、病は早く治ります、勉強では良い成績が出せますし、考え事があれば良いアイデアが浮かびます

氣を出せば、自身の最高の力が出せるのです

胡散臭いと思う方もいるでしょうけど、事実氣の実践者は現在にもいます

例えば、氣を出すことで大成した人で有名な人を挙げますと

王貞治さんや長嶋茂雄さん、荒川博さんが有名なところです

氣の経験者では

今は亡き、千代の富士さんなどがいます

千代の富士さんは、肩の脱臼癖を治す為に、氣圧療法を受けたそうです



氣圧療法を受けている写真もあります

Q. 氣圧療法って何ですか？

A. 簡単に言いますと、氣が出てない人や弱い人に氣を入れてあげることです

これは、氣を出せる人が氣が止まっている人に触れ、氣を入れることで治療するものです

氣は生物が持つ本来の力を引き出します

氣が出ると、自然治癒力がとつともなく上がります

ちよつとした病ならこれで完治させられます

肩こりから、脱臼や骨折まで、様々なものを治せます

よほどの病は流石にキツイですが、その場合は本人が氣を充実させられれば治せます

肝臓病ぐらいなら治った人もいるようです

氣を入れることで治すと言っても、魔法みたいに直ぐ治せるわけではありません

あくまで自然治癒力を高めるものですので、ものによっては長くかかります

千代の富士さんの脱臼癖の治療にも、3ヶ月とかかかったようですが

脱臼癖はちゃんと治ったそうです

Q. 氣と氣は何が違うんですか？

A. 根本的に違います

氣とは本来、絶えずこの世を回っているものです

対して氣は溜めて出し、無くなったら補充するものです

例えるなら

氣は水道管で、氣はタンクといったところですね

氣は常に取り込み、常に出ているものなのです

文字にも現れます

氣とは、气（天地）から常に米（発する）から氣と書きます

氣は、气から発する氣をメ（閉める）から氣と書きます

米は八方に広がる状態を意味しており、メは閉じることを意味してるのです

Q. 合気道に最適な体って何ですか？

A. これといってありません

合気道は誰でも出来る様に出ていきますからね

太ってる人、痩せている人、力の強い人、力の弱い人、背の低い人、背の高い人、体が欠けている人、体が腫れている人

誰にでも出来る様に出来ています

優れた人や才能がある人にしか極められない様なものには価値がありません  
誰にでも出来るからこそ価値があるのです

まあ、どんな体がり易いかと言ったら  
スマートな体が一番でしょう

でも、合気道が誰にでも出来る理由があります

それは、個人個人に合った鍛錬をするからです

全員が全員同じ稽古をやるわけではないのです

合気道は自然に動けないと出来ません

自然に動くにはどうすればいいか？

自分に合ったやり方をすればいいのです

自分の自由な動き方で出来るから合気道は誰でも出来るのです

体が小さいからといって無理に鍛えたり、歳をとったのに昔と同じトレーニングをしたりしたら無理が生じます

その時その時に合った最善の方法をとることが大切です

一瞬一瞬の変化を捉えるのが極意である合気道故に言えることですね

まあ、武道武術なら全てに言えるべきことなのですが

Q. 「歩く姿が武である」ってどういう意味ですか？

A. これは、開祖である植芝氏の言葉ですね

私はこれには複数の意味があると思ってます

一つ、歩いている時も戦闘態勢に入っている

二つ、歩いている姿も武として美しい

三つ、日常が武道の戦場である

四つ、自然な姿が武道の極意である

など

とりあえず簡単にまとめてみますと

歩く姿というのは、文字通り歩いている時の様子でもあり、「日常」の光景でもある

日常というのは、無意識に行なっている行動のことですね

車の運転や歩くこと、息をすることや唾を飲み込むことなど

これらは「自然」と行なっているものですよね

つまり、「歩く姿」というのは「歩行」や「自然」のことを意味してるのだと思つてま

す

ダブルミーニングってやつですね

武道とは日常全てが戦場です

スポーツとは違い、武道は何時如何なる時も戦えなければいけないのです

とりあえず一通り、よく聞かれることを書きました

まだ何か疑問がお有りでしたら、お気軽に質問してください

これを読んで合気道に興味を持ちたり、誤解が解けてくれれば嬉しいです

合気道に限らず、武道武術に興味を持つてくれたら武道家としてとても嬉しいです

それでは、また何かでお会いしましょう

ご愛読ありがとうございます